# 「巻き込まれ親父の反撃」

作　藤次郎政秀

●プロローグ、O県領地漁港

対岸のF県領地の漁港から、内海を挟んで対岸のO県領地の漁港に無事渡る事が出来たHG一行。

O県領地の漁港には、IFを始め先に対岸に渡った、隊員達が手を振って出迎えた。

HGは乗ってきた中型漁船の船長にお礼を言う。

「この度は、本当にありがとうございます。おかげさまで生きて対岸に渡る事ができました。これで今、F県領地で起こっている事を軍に報告する事ができます…それからすぐに向こう（F県領地）に行く事になるでしょうから、その時はよろしくお願いします」

「そうかね。早くこのとんでもねぇ事態を終わらせてくれ…うちらは平穏に漁ができることが一番なんだ！」

「そうですよね。早く漁ができるように努力します」

「頼むよ、あんちゃん！」

船長は、HGの肩をバンバン叩きながらカラカラと笑った。HGは船長が言った日常が早く戻るように最善の努力をする事を心に誓った。

全員が船から降りると、HGは出迎えた中にTTの姿を見た。TTはHGの『家に帰るように』との言葉をすぐに実行せず、HG達がこちらに来るまで待っていた。

「TT、出迎えありがとう…わざわざ待っている事ないのに…」

TTはHGに駆け寄り、HGの両腕を掴むと、

「いえ、私は准尉になにかあったらと思うだけで…とてもここから離れる気になりませんでした」

と言って、涙ぐみながらＨＧの無事を確認して安心していた。

「…そうか…」

ＨＧはＴＴの手を取った…本来なら、ＨＧはＴＴを抱きしめているところであるが、ＴＴは人妻…Ｆ県領地での困難な行動を共にしてくれたＨＧのＴＴに対するこれが精いっぱいの感謝の気持ちであった。ＴＴもそれが分かったので、ＨＧを自分から一回ハグすると、すぐに身を離した。

「では、私はここで…短い間命がけでしたが、また准尉とＨＹと一緒に作戦行動できて嬉しかったです」

ＴＴは、涙目になってＨＧ達に別れを告げる。共にＦ県領地での困難を共にしてくれたＴＴの心境を察してもらい泣きしているＨＹ。

「ＴＴ元気でな、この度はこんなことになって実家に帰れず可哀想だけど、すぐにまた帰れるようになるさ」

ＨＧは一刻も早く彼女の家族に無事返すことをＦ県領地の事件が始まったときから優先していたので、ＨＧはＴＴと分かれるのは辛い心境であるが、精いっぱいの作り笑顔でＴＴを送り出すことにした。

「ＴＴ、さようなら…また会いましょう」

ＨＹの声掛けに

「そうね。またね」

ＴＴはＨＧに敬礼して、カバンを持つと回れ右して埠頭からバス乗り場に向かって歩き出した。途中何度も振り返って頭を下げるのを見て、ＨＧは「とっとと、行け！」とばかりに追いやるように手を振った。

ＴＴが漁港を去るのを見送り、ＨＧは「やれやれ…」と言って、ポケットからパイプを取

り出し口に咥えたら、いきなり背中に拳銃を突き付けられた。

「手を挙げて」

という声の主は、ＩＦである。ＨＧはどうして拳銃を突き付けられる理由がよくわからない…いや、一つ思い当たる節がある。仕方なくＩＦの言葉に従いゆっくりと手を挙げた。

「…いったい、何の真似だいＦ～子ちゃん？」

と少しおどけて某テレビのアニメ番組の主人公調に言うが、ＩＦは無反応に

「ゆっくりこちらを向いて」

と言った。ＨＧが振り返ると、案の定、ＩＦの持つ拳銃のトリガーに指は掛かっていなかった。

「もしかしてー、Ｆ子ちゃんの前でパイプ咥えたのがダメだったかなぁー」

と口調を続けて言っているＨＧは両手を上げているので口にパイプを咥えたまま…ＩＦの目をみると、ＩＦは「ん？」と言って首を少し傾げた。

…どうも、パイプの件ではないようだ…昔、ＩＦと度々飲み明かしていた頃、ＩＦは喉の病気でタバコの煙は駄目との事で、その時は「Ｆ子ちゃんの前ではタバコを吸わない！」と誓ったものの、数日後の飲みの場で誓いを忘れてうっかりＩＦの前でパイプを吸って、嫌われたという過去があるが…その事ではないようだ…また、「ん？」と言って首を少し傾げるこの仕草は先程去っていったＴＴがよくやる仕草で、彼女がすると可愛げがあるが、ＩＦがやるとなんとも…

「気色悪！」

と、ＨＧはげんなりした表情で思わず言ってしまった。その途端、ＩＦは「んだとーー」と言って怒りの表情でＨＧを睨みつけ、ＨＧの胸に突き付けられていた銃口はＨＧの額に変わり、拳銃を持つ手は小刻みに震えていた。でも拳銃には安全装置がかかっていて、また相変わらずトリガーに指を掛けずにいた。後で思えばこれはＴＴを暖かく見送って安心した

ＨＧに対して、ＩＦなりの嫉妬がらみのお茶目を披露したのであろう。

しばらくＩＦとＨＧは睨み合ったまま…立ちすくんでいた。

周囲は心配してオロオロするばかり。ただ、ＨＹだけは呆れていた…そう彼女はこれが二人の民兵会社での現役時代からのじゃれあいの夫婦漫才であることを知っていたからである。でも、そろそろ突っ込みを入れようと思うが、なにせＩＦがＨＧの額に突き付けている拳銃が、ＨＹの位置から拳銃の安全装置の状態を確認できないため、うかつに動けなかった。

誰も突っ込みを入れてくれないので、ハタと冷静になったＩＦ自身も引っ込みがつかなくなってきたので目でＨＧに対して助けを求めた。ＩＦの目を見てＨＧは口元を緩めると、しゃがんで射線から外れつつ、手でＩＦの使用している自動拳銃のスライドを握って激発できないようにして、かがんだ足を伸ばすと同時にＩＦの手ごと銃口を上に向け、反対側の空いている手は、ＩＦの腰に回して抱き寄せた。

一瞬の出来事であったが、拳銃を突き付けられた時の護身術の見本みたいな即応と動きを見せたＨＧの動きより、周囲の目はＨＧがＩＦの腰に手を回して抱き寄せた方に注目を集めた。

抱き寄せられたＩＦも驚いて暫く硬直してしまったが、ふと我に返ると「なにすんねん！」と彼女の出身地の方言丸出しで言ってＨＧに肘鉄をくらわした。

ＩＦの肘鉄が鳩尾に決まり、咥えていたパイプを落としその場にうずくまるＨＧは苦し紛れに

「Ｆ～子ちゃん、連れないんだからー」

と言ったところで、この夫婦漫才終了。ＩＦは拳銃をホルスターに戻し、うずくまっているＨＧに手を差し伸べた。周囲はホッとしたが、ＨＹはやれやれ…という顔をしていた。

●しちめんどくせーー

ＨＧはＩＦに手を引かれ立ち上がると、不満そうに
「Ｆ子ちゃん、今度は何？」
とＩＦを睨みつけるように言うと、
「Ｆ子ちゃん言うな！まだ私達の任務が終わってない。手伝え！」
ＩＦも負けじとＨＧの額に自らの額をこすりつけるようにして睨みつけて言う。（またかよ！作者）
「任務って…もうＦ県領地を出ちまってんぞ！まずこの事本部に連絡したのかよ？」
ＨＧはＩＦが本部に連絡したであろう事は十分承知で言っている。またなにも応答のない事も容易に想像できる。あの本部に巣くう日和見保身内密主義の上層部がＦ県領地の事をニュースか何かで知って、帝都の政府か正規軍参謀本部から問い合わせがあっても、すべてこちら（現場：ＩＦとＹＭ）のせいにして、尻まくって逃げるのがミエミエであることが容易に想像できる…下手するともう現場は全滅したとか言っているかもしれない。ＩＦはＨＧの言葉がＩＦの図星をついていたので、ＩＦはカチンときて、
「んなこと、できるかー。もう一度体制を立て直して向こうに渡る」
と言って、対岸のＦ県領地を指さした。
「だぁ・かぁ・らぁー、戻って来たたった２８人でどーすんの？」
ＩＦのやけ気味の怒声に、ＨＧも同じトーンで反論する。
「大臣と大使が拘束されている所を急襲して確保して、こっちに逃げる」
ＩＦはＦ県領地を指さした手を開いてこちら（Ｏ県領地）に振った。
「そんなことできるかねぇー？」
ＨＧが呆れて問うと、
「やる！だからＨＧも手伝え！」
とＩＦは意固地になって言った。

そのとき、ＨＧの脳裏には「大臣と大使だけ拉致してこっちに逃げてくるのもありかも…」と思いついた。

「わかったよ、Ｆ子ちゃん。めんどくせーー」

ＨＧはＩＦの気迫に根負けしたように、被りを振りながら言った。

それを聞いて皆安堵した。ＨＧが引き続きＩＦと行動を共にするのと、ＨＧの口癖「めんどくせーー」が出たからである。

「再度あっちに戻って作戦するとして…装備はどうする？」

改めてＨＧはＩＦに訊ねた。ＩＦはＨＧの質問に困り顔になった。そして

「これから調達する」

と吐き捨てるように言った。

「どこから？本部はなしのつぶてでしょうーが！」

ＨＧは少し切れ気味に言う。

「この先に海軍基地があるから、そこから調達する」

ＩＦも「（ＨＧだって、あたしの事情を分かりきっているのに…）」と思っているが、ＨＧが痛いところをついて攻めてくるので、苦し紛れに言い放つ。

「またまたー」

などと言っている時に、ＴＹとＩＹがＨＧの所にきて、

「…実は…ＩＦ隊長の命令に背いていますが、海上に投棄する武器をこちらに荷揚げして、あそこの漁具倉庫の一角を借りて置いてあるのです」

「「なにー」」

ＨＧとＩＦは同時に叫んだ

「あんたら、一度ならずも、二度も命令違反をー！」

とＩＦは言ったが、ＨＧは
「でかした！確認しよう！！」
と言って、喜んだ。怒っているＩＦをよそに、ＨＧはＴＹとＩＹに案内されて漁村の漁具倉庫の扉を開けた。そこには、予備の備品・赤外線暗視装置等の装備品をはじめ予備の小銃、軽機関銃、擲弾ランチャー、ロングレンジ狙撃ライフルまであった。
「こんだけあったら、正規軍一個小隊（これは大袈裟…ＨＧが兵士達を鼓舞するため…本当はせいぜい一分隊。作者注）と対等にやりあえるな…あくまで、戦車と空軍支援なしだけど…」
ＨＧは腕組みして考え込んだ。ＩＦはＴＹとＩＹの命令違反が気に食わず、二人に拳銃を突き付けた。ＴＹとＩＹの顔が恐怖に歪む…それを見てＨＧは、
「しちめんどくせーー」
と叫ぶと、ＩＦの後ろから、ＩＦの拳銃のスライドを強く握り、
「落ち着け、ＩＦ…今ここで、２人を失ったら、戦力が低下する」
と静かに言った。それを聞いてＩＦはハタと冷静になり、
「わっ、分かったわよ。手を放して」
この時、ＨＧの後ろでこのやり取りを見ていたＨＹは、ＨＧが『しちめんどくせーー』と言ったので「准尉の『めんどくせー』の最上級がでた！」と不安になった。ＨＧが「しちめんどくせーー」と言うと、ＨＧの中では目の前の問題が既に解決している。次にＨＧが何をしでかすのかと気が気でなかった。
ＨＹは、ＴＴが家に帰った後はＨＧの後ろをついて回った。民兵会社時代、まだ自分の部隊を持たない頃、本部に居る時で特に任務がない場合は、ＨＧの後ろによくつい回っていた…そのため、ＨＧが新兵教育をする場にも居て手伝いとかしていた事がある…今回（Ｆ県領地の件）では、ＨＧがＴＴを主な相方にして居たので、少し離れていたが、ＴＴが帰ったの

で昔みたいにまたＨＧの後ろをついて回る事にした。

●ＨＹのトラウマ

ＨＹは過去にＨＧの「めんどくせーー」は何度か聞いたことが、「しちめんどくせーー」を聞いたのは一度だけである。

それは、ＨＹが部隊長としての初めての任務。正規陸軍に交じって自国の離島を占領したＣ国の反政府組織の残党狩りを行った時である。

離島に逆上陸を試みるも反撃にあい、正規陸軍もろともＨＹの小隊は壊滅に近い状況になった。ＨＹはパニックになってしまい、指揮が満足に取れない状況…ＨＹの部下でＨＹと同期のＫＫが、別の離島で海兵隊との合同作戦に単独で駆り出されているＨＧに連絡した。

ＨＧはこの作戦当初から教え子のＨＹ達を気にかけていて、「何かあったら躊躇わずに俺に連絡しろ！」と行って、ＨＹの作戦指揮を取っている正規陸軍の指揮官とコミュニケーションを密に取っていた。

ＫＫから渡された通信機のレシーバーに、ＨＹが現在の状況と悲鳴に近い泣き言を言ったのを聞いて「しちめんどくせーー、そこを動くなＨＹ！」とレシーバー越しにＨＧの怒鳴り声が響いた。

しばらくして、包囲殲滅されそうになりつつある正規陸軍とＨＹの部隊の頭上を超えて、砲弾が敵の頭上に降り注いだ。這這の体で戦場を逃げ出し、島の海岸にたどり着いたＨＹ達を揚陸艇で迎えたのはＨＧ。後でＨＹは知ることになるが、ＨＧはＨＹの悲鳴を聞いて、自分の作戦している島で海兵隊を出し抜いて他社の民兵会社の人達をまとめて、一気に島を制圧し、返す刀で島にあった大砲を使ってＨＹの居る島に向けて長距離射撃を敢行して一時的に撤退の猶予を与えたのである。後で思えばもし、自分に当たっていたら…と思ってゾッとした。後にＨＧに問いただすと、通信機の電波からＨＹ達の位置を割り出して、そこを

当てないようにして撃ったと、シレっと言った。

ＨＧだからこそできたことであるが、それと同時に一歩誤れば非常に危険な橋を渡ることになる。

結果、ＨＹは部隊に死傷者を多数出し、その責任を問われて自主退職せざるを得なかった…一方、ＨＧはと言うと、本来なら正規軍海兵隊の指揮を無視して単独で敵を制圧した行為の命令違反を問われるところであるが、結果は、敵の早期制圧と目標の確保、友軍の撤退支援と言う離れ業を行い、正規軍から勲章授与の話まで出ていたが、ＨＧに手柄を立てさせるのを嫌った民兵会社の日和見保身内密主義の上層部に正規軍の命令違反を訴えて、勲章授与の件をもみ消してしまった。

ＨＹはそれを気にしていた。

ＨＧは退職の挨拶に来たＨＹに「お前の行動は、正規陸軍の命令に忠実に従ったので、罪に問われるいわれはない。逆に俺の方が命令違反で罪に問われるのが当然…この作戦、計画当初は俺達が囮で、お前達は楽に島を取り返すはずだった。それが、敵がそちら（ＨＹの上陸した島）を重要拠点として防御戦から攻めに兵力を振り向けたのであって、これは、正規軍（陸軍と海兵隊）の作戦ミスだ！俺は、以前からお前らを率いた正規陸軍の指揮官と無線で話をしていたが、敵兵力のバランスが変わったのはこちら（皇国の軍）の誰も気づいていなかった。自分を攻めるな…俺か？俺はいつもの上層部から目をつけられているので…えっ勲章の件？知ってる。先程の指揮官から聞いている。話を上に持っていたのは、当の本人だから…それがチャラになったのは、あいつら（民兵会社の日和見保身内密主義の上層部）の常套手段だからね…じゃ、元気でな！」

と、寂しそうに自分を励ましてくれたＨＧを思い出した。

●あっ、愛銃がぁーー（泣）

「それはそうと…」

ＨＧはＩＹに向かって

「ＩＹおいで」

と手招きした。ＩＹはＨＧの所に来て何でいま自分が呼ばれているか分からず、小首を傾げてみせた。

「ＩＹ、俺の愛銃を返してくれ」

そこでＩＹはＨＧの拳銃を持ったままにしているのを思い出した。一方傍らにいたＩＦは小首を傾げたＩＹを見て「私は気色悪くて、ＩＹはいいのかい！」と嫉妬した。

その時のＩＹの格好は、〝赤ずきんちゃん作戦〟の衣装のままである。赤いケープで目立たないが、その下の白いブラウスと赤いスカートは、シェリー酒の赤色が染みついたまま…

ＩＹはＨＧの拳銃を懐から出そうとしてふと躊躇した。それは、斥候任務中に誤って一気飲みしたシェリー酒を口からこぼして着ている服とＨＧの拳銃にかけてしまったことを思い出したからである。

なかなか、拳銃を出さないＩＹに対してＨＧが手で催促する。ＩＹは意を決し、

「スミマセン！准尉の愛銃にシェリー酒をかけてしまいました！！」

と両手で拳銃を差し出し、頭を下げて謝罪の意を示した。ＨＧはＩＹからシェリー酒まみれの愛銃を受け取り、動作を確認しようとしてスライドを引こうとしたが、スライドがシェリー酒の糖分で固着して動かなかった…

「ゲッ！俺の愛銃…」

ＨＧは驚き、愛銃が動作不良になったことでＩＹに対して怒りを覚えたが、ＩＦとは違い深呼吸をして怒りを鎮め、海に向かって愛銃の引き金を引くと、バン！という音がして遠くで水しぶきが上がった。しかし、愛銃のスライドは動かず、発射後の空薬莢も排出されない。ＨＧは既に愛銃のマガジン（弾倉）を抜いているので、本来なら、愛銃は弾丸発射後に空薬

莢を排出し、次弾が装填できずにスライドが後退したまま止まる。ＨＧはそれを期待していたのだが…「こりゃ、相当染み込んでなぁー（泣）」とＨＧは、今の射撃でひょっとしたら…と言う甘い考が打ち砕かれた。

ＨＧはＩＹの顔を横目で見る。涙目で辛そうなほど落ち込んでいる…ＩＹがこれを悔やんでまた死にたいと言い出されると困るので、

「ま…まぁ、預かってくれてありがとう…こりゃ、分解整備しないとなぁ…」

と愛銃を懐にしまい落ち込みながら寂しそうに言った。それを見てＩＹは罪の意識を一層深くして、

「申し訳ありません。准尉！」

とそのまま土下座でもしかねない状況になった。

「まぁ、こうなっちまったものは仕方がない…ここじゃ分解できないから持って帰ってクリーニングと整備決定。ＩＹこれ以上自分を追い込むな！Ｆ子ちゃん、代わりの拳銃頂戴」

と言って、ＩＦの方を見るがＩＦは、フィっとそっぽを向いて、

「そんなもの無い、自動小銃使え」

と冷たく言い放った。

「ったく、冷たいんだからー、Ｆ子ちゃんはぁー」

と拗ねるように言ってから「借りるぞ」と傍にある自動小銃を手に取った。そして、

「ＩＹ！」

「ハイ！」

ＨＧから声をかけられたＩＹはビクッとして直立不殿姿勢になった。

「その酒臭い衣装から戦闘服に着替えて。それから俺も酒臭いから戦闘服貸して」

と振り向いてＩＹを背負って移動している時にＩＹの服に染み込んだシェリー酒から色移りした背広を見せた。ＩＹが自責の念にかられ漁具倉庫の中にあるコンテナを開けている

のを見て、ＨＧの後ろに控えているＨＹに振り返り、
「ＨＹ」
「はい」
「お前さんも戦闘服に着替えてくれ」
「ハイ！」
ＨＹはＨＧに敬礼した。ＨＹの心はすっかり民兵会社時代に戻って居た。

「いやー、数か月ぶりの戦闘服は、身が引き締まるねぇーー」
とＨＧは戦闘服に着替えて、陽気に戦闘服の襟を正しながら言った。
そして、同じく戦闘服に着替えたＨＹと共にＩＦの前に立ち。
「ＨＧならびにＨＹ、ただいま業務（本来なら〝軍務〟と言うべきなのであるが、民兵会社内の仕事なので、敢えて〝業務〟。作者注）に復帰します」
と言って、ＩＦに敬礼した。ＩＦも答礼をして、
「ただいまから、ＨＧ、ＨＹの臨時復帰を承認します」
と慇懃に答える。

「…ところでＦ子ちゃん」
格好をつけているＩＦに対していきなり砕けた口調でＨＧは言う。
「…『Ｆ子ちゃん』と言うなと言ったでしょ！…でなに？」
態度を変えずに、ＩＦが言うと、
「再度指揮権の確認したいのだけど」
ＨＧはＩＦに甘えるように言うと、ＩＦはそのまま
「引き続きＨＧ、あんたに全指揮権を預けます」

「ほい、引き続き隊長は俺ね！F子ちゃん」
HGはニヤケて承知する。
『『F子ちゃん』と言うなと何度も言ってるでしょ！」
IFが切れ気味に言う言葉をスルーして、HGは港に居る隊員たちを集めて、
「引き続きこの俺が全指揮権を執る事が決まりました…皆ヨロシク！」
と軽々と宣言した。
それを聞いて、IFとYMの部下の隊員達は、対岸のF県領地での撤退戦でのHGの指揮を見ているので「准尉、また頼んます」とか「また准尉の指揮下で働けて光栄です」とか、中には「今更ですかぁ？」と軽口を叩く者もいて、肯定的だった。

●O県領地海軍基地
HGはIFに、本部にF県領地のテロの事を通報してきた海軍軍人の名前を聞き出し、YMと共に、O県領地の海軍基地に赴いた。
なぜIFを同行しないかと言うと、
「ここ（漁港）にYMかF子ちゃんのどちらか指揮官クラスが居ないと困るでしょ！YMはF県領地の現地指揮官だし、俺は全体指揮官だし…よって、F子ちゃんは留守番！」
と、こじつける様に言った。
「えーー」

O県領地海軍基地…
正面入り口の衛兵にIFから聞き出した海軍軍人の名前を出し、要件を伝えた。
かなり待たされると思ったが、相手はすぐに会うとの事。迎えに来た車にYMと共に乗り込むと、車は司令部の前に停車した。

司令部の入り口では件の軍人と思われるＨＧよりやや若い中年の男が居た…階級は少尉である。ＨＧとＹＭは車から降りて、その海軍少尉に敬礼した。海軍少尉も答礼をし（海軍と陸軍とでは敬礼の格好が異なります。ＨＧ達は民兵会社で正規陸軍と共に作戦することが多いので陸軍式）、「ようこそＯ県領地海軍基地へ」と告げた。

海軍少尉の案内で司令部の一室に通される。ドアには〝情報部〟と銘板がついていた。

その一角の会議室に通され、ソファーにかける様促された。

ソファーに腰掛けるＨＧとＹＭ、すぐに海軍少尉と対話するのかと思いきや、少尉は会議室を出て行った。

ＨＧとＹＭは立派な会議室だなぁ…と思いながら見回していると、女性下士官が紅茶を出してきた。飲まずに待っていると、先程の海軍少尉の後に続き、初老と思われる海軍中佐と数人の海軍兵士が入って来た。立ち上がるＨＧとＹＭ。共に海軍中佐に対して敬礼する。

「まぁ、お気を楽に…座りましょう」と答礼をして海軍中佐は言った。

海軍中佐は、ソファーセットの上席に座り、海軍少尉はＨＧの正面に座った。他の兵士たちは海軍少尉の後ろにパイプ椅子を出して座った。一人の兵士は、ノートＰＣを広げて入り口付近にある机についた。

「えーと、君達との話は公式文書として記録されますが、よろしいですか？」

やわらかな物腰で海軍中佐は言った。

「はい、構いません」

ＨＧが海軍中佐の方を向いて返事する。

「よろしい。ああ、自己紹介を忘れていました。私は当Ｏ県領地海軍基地の司令部情報部長中佐のＡＴです」

それを聞いて、ＨＧは「（ずいぶん大物が出てきたな）」と思った。続いて

「私は、Ｏ県領地海軍基地の司令部情報部情報課少尉のＯＪです」

と正面の海軍少尉が挨拶する。その後、海軍少尉の後ろに座っている兵士たちが自己紹介する。それが終わり、

「民兵会社ＤＫ、本部のＨＧです。こちらは弊社Ｆ県領地の支部長ＹＭです」

とＨＧは名乗り、ＹＭと共に座ったまま軽い会釈をした。

「挨拶はほどほどに、Ｆ県領地では大変な目にお逢いしたそうですね」

とあくまで物腰低く丁寧な言い回しでＡＴ中佐が話し始めた。

「はい、何とかこちらまでたどり着きました」

ＨＧも、相手に合わせて静かなトーンで話す。

「早速ですが、向こうはどう言う状況ですか？」

とＡＴ中佐は聞いてきた。ＡＴ中佐の目から真剣さを感じ取ったＨＧは「(海軍も対岸の情報を知りたがっているな)」と確信し、

「Ｆ県領地の地図があると助かりますが…あっ、そちらの壁にありますね、ポインターを拝借願えればありがたいです」

と前置きした。ＨＧは兵士からレーザーポインターを受け取ると、席に座ったまま壁の地図を示しながら、事件当日の空港からここまで来るまでの脱出途中で見聞きした情報と経路をＨＧ自身とＴＴ、ＨＹが民間人として行動していた事実を抜いて、時系列でありのまま話した。

ＨＧが一通り説明を終え、ＡＴ中佐の顔を見るとＡＴ中佐は深刻そうにソファーから前かがみの姿勢で手を組んでその上に顎を乗せた格好で何か考え込んでいるように見えた。

「説明ご苦労様です。お茶でもどうぞ」

とＯＪ少尉は既に出されている紅茶をＨＧ達に勧めた。

やがて我に返った海軍中佐は、ＨＧの説明にいくつかの詳細な説明を求めた。ＨＧも隠す

ことなく応じる。
そして、最後に
「この状況を君たちはどう分析しているのだね？」
とＡＴ中佐は核心をついた質問を投げかけてきた。それに対して、ＨＧも深刻そうに
「これは、あくまで私共の考えた結論ですが…」
と前置きした上で、ＨＧは結論から始めた。
「本事件の首謀者はＣ国の大使です。我々が現地の市街地や各地を偵察し、各種情報を整理、分析した結果です。」

●ＨＧレポート
「…うむ。なぜそう考えたかを聞かせてもらおう」
ＡＴ中佐は一層ＨＧの方に身を乗り出す。ＨＧはＩＦ達と山中に潜伏している最中に集めた情報とそれを基に整理した過程を述べた。
「Ｃ国大使が自国の兵をＦ県領地に引き入れ、彼らが外務大臣を人質に取ります。大臣は地元選挙区出身でＦ県領地にある正規陸軍と警察とに強いコネクションがあり、大使は大臣に、『Ｆ県領地にある核施設を制圧しているので、地元住民の命が惜しければ、Ｆ県領地を封鎖せよ』と脅します。脅すタイミングは両者がＦ県領地の空港に降り立ち、市街の高級ホテルでの会食中でしょう…その時にはＣ国の兵士達はとっくに上陸して核施設と北の海岸を確保しているはずです。　そして、一部は市街地に潜入していたでしょう…いや、もしかすると、もっと以前に市街地に工作員として潜入していたかもしれません」
「ふむ」
「大臣は大使の脅しを真に受け、Ｆ県領地の正規陸軍と警察トップに連絡して通信インフラと交通機関の封鎖を指示します」

ＨＧは、自分の額に右手を当てながら話をつづけた。口調も心なしかテレビの某刑事の語り口調になってきた。

「翌日、複数の爆発がありました。場所はいずれもＦ県領地の民兵会社の事務所です。ご存じの様に我々民兵会社は、通常、軍や警察、行政機関の依頼で任務を行います。任務以外では政府の〝特別銃器携帯・使用許可証〟がなければ、任務外での銃火器の携行・使用は禁じられていますので、政府に申請してある保管場所…大抵は民兵会社の事務所に在ります武器庫に装備の銃火器と、また別に銃弾と爆薬類を耐火金庫に入れて保管します。そこを爆破すれば、保管している銃器弾薬は使用できなくなります。あとは丸腰の民兵会社の従業員を監視するか捕らえて監禁すれば、銃器をもった抵抗勢力…あっ、この場合、民兵会社の従業員ですが…それを無くすことができます」

「ほぉ」

「爆破したのは多分Ｃ国の工作員です。正規陸軍と警察は大臣の命令に市街地に展開したものの、上からの命令に疑問を感じていた者も多いはずです。そこに爆発事件が発生し、テロリストを捕まえるためにまず市街地の閉鎖、街道の封鎖…と行ったと思われます。ただ、弊社の支部がある建物は爆破対象になっていませんでした…理由は弊社が市街地郊外にあったのと、弊社の装備の武器弾薬爆薬類は地元正規陸軍駐屯地に預けているのからだと思います。そのため、事務所は爆破されずに、出勤してきた従業員を捕まえればいいのです。しかし、ここに誤算がありました。それは弊社支部の従業員は事件当日の朝に武装して輸送機で来る弊社本部の増援を全員で迎えに行ったことです…それは、余談ですが…」

言って、ＨＧはちょっと苦笑いして、話をつづけた。隣にいるＹＭはＨＧの仕草と口調に笑いを堪えるのに必死だった。

「Ｃ国の兵士は核施設を占拠してなにをするかと言いますと、この核施設には原子力発電所の他に核燃料再処理施設と核燃料貯蔵施設が併設されています。Ｃ国の兵士は核再処理

施設で生成された高濃度プルトニウムの再処理核燃料…ＭＯＸ燃料ですが…これをＣ国に運び出すのが真の目的です。多分核兵器を製造するのに使用されるでしょう…」

ＨＧはレーザーポインターを持ち壁の地図を指す。

「Ｃ国の兵士は、現在２か所に分かれています。一つは先程話した核施設です…そしてもう一方はＦ県領地と隣接するＳ県領地に近い半島の付け根の海岸です。なぜなら、そこには外海に面した唯一砂浜があります。それ以外は断崖絶壁の海岸です。ご存じの様に、核施設は、半島の東突端部にあります。ですが、やや内海内に入り込みすぎています。本来なら核施設にある専用の埠頭からＭＯＸ燃料を船に積み込めればいいのですが、内湾には当海軍基地があり、それができない…運び出せるのは半島の反対側の先程の海岸のみ。フツーなら、この距離をＭＯＸ燃料が移動するには結構な時間と手間がかかります。並みの犯罪組織やテロ組織なら絶対に手を出さないでしょう…そのことは（皇国）政府も織り込み済みの事だと思います…でも、それが国家規模の犯罪ならばできると考えた御仁が出てきました。それが大使です」

「うーむ」

「大使は、地元出身の大臣とかの地で会談する事になり、チャンスが訪れたと考え、ＭＯＸ燃料強奪の計画を実行します。大臣と現地入りして、大臣と自らテロリストの人質になることで、世間の注目をひきつつ、その裏では政府に核施設の占拠を宣言しているはずです。その根拠は政府の対応が早かったことです。事件２日目に半島の外海側の海岸に上陸しようとした近衛師団が先に海岸に上陸していたＣ国の兵隊に返り討ちにあっています…マスコミの報道では、『行方不明』となっていますが…近衛師団の目的は、まずＦ県領地の正規陸軍を査察後吸収し、それから当海軍基地と共同で核施設の奪還を考えていたと思います。しかし、近衛師団は、敵が既に海岸に橋頭堡を築いていたとは知らずに上陸して結果返り討ちにあったのでしょう…その証拠の写真はここにあります」

と言って、ＨＧは胸のポケットを叩いた。そこにはスマートフォンが入っている。
ＨＧはポケットからスマートフォンを取り出し、撮影した海岸にいるＣ国の兵隊とそれに捕虜になった近衛師団の兵隊と思われる写真を見せた。それを見たＡＴ中佐とＯＪ少尉は唸った。ＨＧは続けた。
「大使は、Ｆ県領地を封鎖し、自ら囮となってその間にＭＯＸ燃料を運び出すと言う事をやってのけようとしています…最もＭＯＸ燃料はまだ核燃料再処理施設から運び出されていませんが…」

ＹＭはＨＧとＡＴ中佐のやり取りを見て「先輩、しっかりプレゼンしてる…」と驚いていた。ＨＧは今まで政府機関の庁舎に行って（中には出頭を求められ）、そこで役人を相手してきたのである。時は虚勢などの駆け引きもしたが、この場では事実に基づいた話をしているので、堂々と話をしていた。

●海軍の話

「…なるほど、核燃料再処理施設のＭＯＸ燃料か…それは考えていなかったな…また核施設が抑えられていたのを探知できなかった事は、我々の重大な落ち度だな…言い訳がましいが、核施設の警備はＦ県領地の正規陸軍の任務であり、我々海軍には核施設で何かが起こっても、正規陸軍から連絡がなければ動きようがない…これは、今後見直す必要があるな」
とＡＴ中佐は言って黙り込んだ。それから、
「ＨＧ、君が包み隠さず理論的に整理して報告をしてくれて助かる。話は前後するが私からも正直に話そう…なぜ、Ｆ県領地でテロが起こる情報を掴んだのか…ＯＪ少尉」
ＯＪ少尉が説明を始めた。ＨＧは、ＡＴ中佐がＨＧのプレゼンに感銘を受けたのか海軍側の手の内を明かしてくれることを歓迎した。

「我々は、事件数日前から、外洋で不審な行動をする潜水艦を発見し、当基地所属の駆潜艇で浮上するよう警告を続けました。潜水艦は一向に浮上する様子がないので、駆潜艇は潜水艦を追尾していました。潜水艦は時折海面近くまで上がり通信アンテナを海上に出してどこかと通信しているのを駆潜艇が傍受しました」

「…それは、確か周波数帯域××ＫＨｚでは？」

とＨＧが訊ねると、ＯＪ少尉は驚いてすぐさま後ろにいる兵士の一人に傍受記録を持ってくる様指示をした。

兵士が出ていくとＯＪ少尉は話をつづけた。

「傍受した通信内容は、暗号化されていて現在も解析中です。その中にはなぜか正規陸軍の使用する周波数帯もありました…当然その通信内容は暗号化されていましたが、部分的にですが内容も解読できました。その内容に〝大臣〟〝大使〟〝拘束〟〝テロ〟の言葉が散見され、我々海軍は近日中に行られるＦ県領地での大臣と大使の会談の場でテロがあるのではないかと推測しました。そのことを急ぎ帝都軍令部ならびにＦ県領地正規陸軍駐屯地に連絡しましたが、Ｆ県領地正規陸軍駐屯地からは『そんなばかな！』と一笑に付されました。ですので、我々はＦ県領地の正規陸軍と民兵会社は、このテロに加担しているではないかと考え、Ｆ県領地の民兵会社の中で唯一帝都に本社がある御社本部に情報を伝え、逆に何か現地の情報を得らないかと思ったのですが…なにも返事がありませんでした」

と残念そうなＯＪ少尉の顔を見てＨＧは本部の日和見保身内密主義の上層部達の常套手段に腹が立った。

「その件につきましては、折角海軍から通報を受けてなにもリアクションを返さなかった事を、弊社を代表して深くお詫びいたします」

と言って、ＨＧは座ったまま深く頭を下げた。ＨＧの言葉に「（エッ？こちらに情報を渡さなかった日和見保身内密主義の上層部が悪いんじゃないの？）」とＹＭは思ったが、ＨＧ

が頭を下げたので、ＹＭもそれに従った。

「まぁ、起こってしまったことは仕方がありません、お二人とも頭を上げて下さい。ＯＪ少尉、続けて」

ＡＴ中佐は手を挙げてＨＧ達を咎める意思がない事を伝えた。それを聞いてＨＧは「(懐が深いな、こういう上司の元なら、働き甲斐があるだろうなぁ…)」と一瞬ＨＧは、民兵会社に入社したての頃、可愛がってくれた顧問のＹＪと相談役のＩＴを思い出していた。

「はい、続けます…すると事件二日前に不審な潜水艦の数が３隻に増えたので、駆潜艇は基地司令部に増援を進言しました。駆潜艇一隻では手に負えない数です。そのため当基地司令部は駆潜艇ならびに駆逐艦隊全艦に出動命令を下しましたが、湾出口で機雷原を探知し、掃海艇を派遣して掃海の任に当たらせました。朝から日没までかかって何とか艦が通過できる程度の航路を確保したのですが、いざ艦船を出すといつの間にか航路上に別の機雷が敷設されていたり…と、鼬ごっこをしている間に外海に出動した掃海艇は当基地に帰投できなくなり、燃料補給のため当該海域を離れなければならなくなったので、不審な潜水艦を見逃さざるを得ない状況になったところで、あの事件が起こりました…あと、近衛師団の上陸作戦につきまして、我々海軍から補足しますと、帝都軍令部に通報した後で、本基地所属の強襲揚陸艦と海兵隊を使用してＦ県領地に内海側から上陸する予定でしたが、先程の湾外の不審な潜水艦の事もあり、強襲揚陸艦の出航を取りやめて待機する事になりました。そのため、帝都から近衛師団１個小隊がＳ県領地の海軍基地からＦ県領地の外海の海岸の砂浜に輸送艦から上陸することになりまして…この様な事態になりました」

と、ＯＪ少尉は話した。

「そうでしたか…貴重な情報、誠にありがとうございます。正規陸軍の使用する無線通信機の周波数の電波を傍受したとの事ですが、そうすると、正規陸軍に内通するものがいると言う事でしょうか？」

「…そうかもしれませんし、今考えると敵の欺瞞かもしれません」
「欺瞞ですか？」
「敵の呼びかけに対する、返信を傍受していませんので…」
「ありがとうございます」
とＨＧが言って軽く頭を下げた。

●種明かし

その頃、「お待たせしました！」と言って士官が通信傍受記録を会議室に入って来た。
士官は持ってきた記録をすぐにＨＧに渡さずに、ＡＴ中佐とＯＪ少尉に渡し、件の周波数の書かれている部分を指で示した。
そこは、情報の公開権限に統制が取れているなとＨＧが感心していると、ＡＴ中佐はそのまま記録を何も隠さずにＨＧに渡した。ＨＧは驚いたが、ＡＴ中佐がＨＧを信用してくれた事に感謝しつつ、ポケットとから手帳を取り出すと、テーブルに広げた傍受記録用紙の上に置き、記載してある周波数帯域の数値との比較を始めた。
それをＡＴ中佐とＯＪ少尉は興味を示した。その視線に気づいたＨＧは、手帳を示して
「あっ…もしよろしければ、コピー取ります？これはＦ県領地に居た時にラジオでノイズが乗る周波数をチェックした結果です」
と惜しみなく説明を始めた。海軍もなにも隠さずに情報を提供してくれたので、こちらも手の内を明かすことにした…もっと、この手法はＨＧくらいしか使いこなせない。
「ノイズ？」
ＡＴ中佐が尋ねると、ＨＧはポケットから短波ラジオを取り出して、
「はい、この携帯用の短波ラジオが捕らえた、放送以外に聞こえるノイズです。ラジオのアナログダイヤルで番組の周波数に合わせている途中で『ザー』とか『ピー』とかいう音がラ

ジオから聞こえますね…あれです。あれは、放送以外の電波や輻射ノイズといいまして…電子機器から電波が発信されています。外部との無線通信の電波以外は輻射ノイズとして、他の機器に影響を与えないように極力なくす必要があります。現代の技術では電子機器の特性上全くでない様にはできません。電子機器のＥＭＣの技術の話になりますが、これ以上難しい話はやめます。で、このノイズを拾うことはどこかに電子機器や通信機がある事になります。この表の左端は、真夜中の山中でとらえたノイズの周波数です。そのすぐ右にはノイズでも私の知っている無線の周波数や情報端末から出る輻射ノイズの周波数があります。その左に各所…山中に潜伏中に味方の持っている機器のノイズ、北の海岸でＣ国の兵士が居る近くで観測したノイズ、Ｆ県領地の警察無線の周波数や正規陸軍の無線機器や他の軍用機器のノイズ…これがあれば、山中や街角に潜伏していて、何らかの機器を持った仮想敵…この場合はＦ県領地の正規陸軍や警察やＣ国の兵士ですが…ラジオで探っていればそれらが近くに居る確率が高くなりますので…」

ＡＴ中佐とＯＪ少尉は、分かったような、分からないような顔をした。それをおかないなしにＨＧは続けた。

「市販の短波ラジオなので、通信周波数帯域なら、内容が聞こえる可能性がありますし、デジタル暗号化されていれば、内容はわかりませんが何か近くで通信しているということが分かります。欠点は、ラジオの視聴周波数帯域検出機能である周波帯スイープを常にしていないといけないことと、事前準備に手間がかかるということですね」

「凄い！御社はこれを…？」

「いえいえ、これは私のオリジナルです」

とＨＧが照れながらいうと、ＡＴ中佐とＯＪ少尉はＨＧに尊敬のまなざしを送った。ＨＧの隣に座っているＹＭ。ＨＧのメモの話を山中で聞いたが、その理論が通信工学というより電磁気学の話なので、大学で学んではいたがすっかり忘れていた。ＨＧの説明を聞いて納得し

たが、今ここでＨＧの説明を聞いて、「(凄い！しかも分かり易く説明している)」と感心した。

「で、肝心の周波数帯域については？」

通信記録表を持ってきた士官が聞いた。ＨＧはその声に慌ててメモに指を這わせて、

「…あっ、この周波数ですね。確かにＣ国の兵士の使う機器…それも軍用通信機器の暗号通信用周波数帯域ですね。ここにそう書いてあります」

「なぜ知っているのかね？」

ＡＴ中佐が質問した。ＨＧは少しおどけるように

「私は、過去何度も皇国領の離島に侵攻してきたＣ国兵の排除作戦に従軍してきました。その時に入手した敵の通信機の周波数帯をメモして、こちら側から敵無線機の電波を傍受して…別に内容は関係ありません…発信源を割り出して遠方から榴弾を打ち込んだ事があります」

とＨＧは正直に話した。ＡＴ中佐を始めその場に居た海軍兵士達は「おおーっ」と言って、どよめいた。

●海軍の援助

ＨＧは「失礼」と言って、紅茶を一口飲むと、記録表とメモを見ながら、ＨＧはＡＴ中佐とＯＪ少尉に対して

「話を戻しますと、海軍では事件当日の数日前から不審な潜水艦を補足していたのですね」

「そうです」

ＯＪ少尉が答える。

「その時から、不審な潜水艦…もうＣ国の潜水艦と言っていいかもしれません…が発する電波を傍受していたと言う事ですから、既にＦ県領地の北側の海岸には、Ｃ国の工作員また

は兵士が居たことになりますね。また、正規陸軍の軍用無線の周波数も傍受したとおっしゃっていましたので、F県領地の正規陸軍の中に、C国の協力者かまたはC国の工作員が紛れ込んでいるのかもしれませんね」

「…うーん、残念ながらそうなりますね」

ＯＪ少尉は唸りながら返事をする。

照合と説明が終わると、ＡＴ中佐はテーブルに乗り出していたその身をおこして、椅子に深く座り込んで深いため息をついた。

「なかなか面白く興味ある話を聞かせていただきました。そして、貴重な情報を惜しみなく我々に提供してくれたことに感謝します。ＨＧ」

とＡＴ中佐は言った。

「…で、君達はこれからどうするのかね？」

と聞いてきた。

「我々は、ここまで来ましたが、本部からの指令は大使と大臣の要人警護の任務であり、また帰還命令が出ていません。現場指揮者としては体制を整えた上、向こう（F県領地）に赴き、再び要人警護の任につく所存です」

と堂々と言った。

「…なるほど、よくわかりました『要人警護の任』ですね…」

と言ってＡＴ中佐は意味の深い微笑みをした。

「はい、〝要人警護の任〟と言う名の大臣と大使の保護です…そのために、ここの基地に駐留している海兵隊にご協力をお願いいただければ、嬉しいのですが、あっ、このことはオフレコで！」

「F県領地内の事と、核施設は？」

と、ＡＴ中佐が尋ねると、

「さすがにそこまでは弊社の受けている業務に関係ないですし、国家規模の話ですので、それはそれ、陸軍と海軍サンたちで解決していただかないと…あっ、これもオフレコで…」
「そうだね、君、今のＨＧの言葉は記録しないように」
ＡＴ中佐は会議室の入り口で、ノートＰＣで議事録を録っている兵士を振り仰ぎ言った。
「はい」
議事録を録っている兵士が返事をすると、ＡＴ中佐はＨＧに向き直り、
「君たちの任務は了解しました。我が海軍は全面バックアップをしましょう！取り敢えず今何か必要なものはあるかね？」
と言ってくれた。
「中佐（ＡＴは海軍なので〝殿〟の敬称はつけない）、ありがとうございます。まずは、食料の提供をお願いします…情けない話ですが、事件当日からロクに食べ物にありつけず山中に潜んでいた部下が多いので…それからいくつかの装備を貸していただきたく。あと対テロ用の装備の融通をお願いいたします」
と言って、ＨＧとＹＭは頭を下げた。
「よかろう、後はＯＪ少尉と話し合いたまへ！それから、海兵隊のＳＲ大尉と各中隊長をここに来るよう伝えてくれ」
ＯＪ少尉の後ろに控えていた兵士にいいつける。兵士は会議室を出て行った…多分、今言った海兵隊の人たちを電話で呼び出して居るだろう。
その間、ＡＴ中佐とＯＪ少尉、ＨＧとＹＭは簡単な雑談をしていた。その内、
「海兵隊第１７海兵団所属、大隊長ＳＲ以下、３名入ります！」
と言う声が会議室ドアの外から聞こえた。
「ＳＲ大尉、入り給え」
ＡＴ中佐が会議室への入室を促すと、恰幅の良い如何にも海兵隊員と言ういでたちの兵

士が入って来た。
「こちらは、民兵会社ＤＫのＨＧ君とＹＭ君。今朝Ｆ県領地からこちらに渡ってきた人達だ。ＨＧ君、こちらは当基地に駐留する海兵隊の大隊長ＳＲと彼の部下の中隊長達だ」
とＡＴ中佐が紹介すると、
「民兵会社ＤＫ、本部のＨＧです。こちらは弊社Ｆ県領地の支部長ＹＭです」
と言って、ＨＧとＹＭはソファーから立ち上がって挨拶をした。
「私は、海兵隊第１７海兵団所属、第５大隊　大隊長ＳＲだ」
と立派な髭面の男がＨＧに笑いかける。それに続いて、
「第一中隊　中隊長　ＬＲです」
「第二中隊　中隊長　ＣＲです」
「第三中隊　中隊長　ＳＬです」
「「よろしく！」」
互いに自己紹介が終わったのを見届けて、ＡＴ中佐は席を立つと、
「では、私はこれから君の話を司令部に報告してくる。後は、彼らと話をしてくれ給え…ＳＲ大尉は彼らの話を聞いて、協力するように」
と言って、ＡＴ中佐はＨＧに握手を求めた。ＨＧは立ち上がってＡＴ中佐の手を握った。これが海軍との提携の誓約になる…あくまでもＯ県領地海軍基地とＨＧ個人との口約束ではあるが…
ＡＴ中佐が入り口で、ノートＰＣで議事録を録っていた兵士と共に会議室を出て行った後、ＯＪ少尉の仕切りで会議が続けられた。ＯＪ少尉はＨＧからの話を時折ＨＧに確認を取りながら、自ら説明して、
「…と言う、情報と事実がここにいるＨＧ君からもたらされました」

ＯＪ少尉の話にどよめく海兵隊の部隊長達。

「君…ＨＧと言ったか、よくこの短時間でそれだけの情報と推測をよくまとめられたものだ」

ＳＲ大尉がＨＧとＹＭを交互に見て、感嘆するように言った。

「いや…事実を見て把握しないと、弊社の社員達を無事ここまで避難させることができないと思いましたので」

ＨＧが謙遜して言うと、

「それで、こちらはどう出る？ＨＧ何か案があるかね？」

ＳＲ大尉は試すような眼でＨＧを見る。隣ではＹＭがオロオロしていた。

●ＨＧとＳＲ大尉

ＨＧはＳＲ大尉とＯＪ少尉を交互に見ながら、

「恐れながら、私達の任務は『大臣と大使の要人警護』です…我々の兵力は３０人に満たない人数しかおりません。当該軍基地に駐留する海兵隊の皆さんは、テロリストからの核施設奪還のための訓練は日頃正規陸軍と行っているのでは？」

と、逆に質問をした。

「その通り！」

ＳＲ大尉は頷いた。ＨＧは続けて

「また、Ｆ県領地の正規陸軍が本来外国勢力から守る北の海岸を守備できない場合、強襲揚陸艦を使用した上陸奪還訓練を海兵隊は行って居るのではないですか？」

と言うと、

「それも、その通り！」

ＳＲ大尉はまた頷く…しかし、その口調は低くなっていた。

「今回イレギュラーなのは、協力関係のあるＦ県領地の正規陸軍が現在の時点で仮想敵になっているので、核施設の奪還と北の海岸の奪還に協力してくれないことです。しかし、この場合は、海軍としてその優先順位が決められているのでは？」

と言って、ＨＧがＳＲ大尉を見てニヤリとすると、ＳＲ大尉は「こいつ…」と思いながら、

「ハハハ、よくお分かりで…」

ＳＲ大尉は豪快に笑った。ＨＧは続ける。

「問題は、正規陸軍抜きでの作戦と、核施設の奪還と北の海岸の奪還はほぼ同時に行わなければ、敵を一網打尽にできないと私は考えています。そのため、海兵隊だけでこの作戦を行おうとすると、兵力を分散させなければなりませんね」

「そうだ」

「私が考えるには、北の海岸に陣取っている兵力は精鋭の近衛師団１個小隊を捕獲したのと、私が調べた範囲で推測すると多分１個小隊です。それも、近衛師団は海岸に何も居ないと思って上陸したところ、捕獲されたと思われます」

「ふむ。それで？」

ＳＲ大尉は身を乗り出し、ＨＧに催促した。

「東の核施設は、ＭＯＸ燃料を運び出すから、それなりの人数が必要ですが、潜水艦で上陸できる人数は、完全部武装の兵士なら潜水艦一隻当たり、多くても１０名…もっとも、上陸部隊輸送専用の潜水艦を敵が持っているのならば、話は違いますが…ただ３隻ソナーで捕らえたと先程ＯＪ少尉が言っていましたので、多分、一隻当たり１０人で間違いないかと…上陸する兵士は、輸送艦で運び、我が国の領海外から、潜水艦に分乗して夜間に上陸したのでは…それも事件以前から着々と進めていたとしても、そんなに一度に潜水艦を多数この海域に展開するほどはできないと考え、最大３隻と考えられます。ですので、多分Ｆ県領地に上陸しているのは、せいぜい１個中隊以下なのではないでしょうか…その内、１個小隊が海

岸、もう2個小隊は核施設…あとF県領地市街に工作員数人…もっとも、工作員ははるか以前からF県領地に居たでしょうし、F県領地正規陸軍内にも居るかもしれません」

ここで、HGは話を一回区切り、紅茶を一口飲むとSR大尉の手が上がった。HGが「はい」と言うと。SR大尉は

「質問だが…OJ少尉の話だと潜水艦を3隻探知したとあるが、君はなぜ潜水艦が最大3隻だけだと判断したのかね？」

「今の時代…まぁなんでもそうですが、特に航空機と艦艇の製造価格は、特に近代装備が非常に高価であるために、新型になればなるほど高額になります。そのため、保有できる航空機と艦艇の数はその国情でできる国防の範囲ギリギリですよね…当然我が国もですが…ましてや国連主導の軍縮で、国防予算は各国削られ、保有艦艇数も決められて我が国の海軍でも廃艦になった艦艇が多くあります。それは、C国でも同じ理由のはずです。仮に廃艦になった艦艇…この場合潜水艦ですが…それを動員したとしても、C国の潜水艦保有数ではF県領地沖に展開できる潜水艦の数は3隻が妥当かと…それに兵員輸送専用の潜水艦の構想は昔からありましたが、潜水艦を運用するギリギリの人数と輸送する兵員の数と主に酸素供給の問題で大型化するのでまだどこの国も実用化していませんし…」

「なんでそんなこと知っている？」

SR大尉は驚いて、それからHGを訝し気に見る。HGはそれに対して、

「いや…私、軍オタクなので、月刊誌〝世界の軍隊〟を子供の頃から定期購読していまして、お恥ずかしい…」

とHGは照れ笑いしながら言った。

「ああ…あの雑誌か、俺も読んでいるよ。あの雑誌はかなり細かい話も載っているからな。HG、君とは友達になれそうだ…ハハハ」

「光栄ですSR大尉」

ＳＲ大尉は納得しＨＧと共に笑いあった。

「もう一つ、質問」

ＳＲ大尉はＨＧに指を立てて

「君は、北の海岸と核施設両方で敵に見つからず、写真を撮ってきた場所を教えてくれんか？」

「はい」

と言って、ＨＧはＦ県領地の地図を示す。それを見てＳＲ大尉とＯＪ少尉は「うむ」と頷く。

「…なるほど、ここか！…ハハハ、ＨＧあんた運がいいよ、特に核施設の裏山の山頂付近のここの場所に行くために藪漕ぎしたのは正解だ。この辺は野生動物の獣道が複雑になっていて、侵入警戒センサーに引っかかっても少ない人数なら動物…例えばシカの群れが通ったくらいにしか思われないからなぁ…」

「あっ、でもこの山頂付近に本社支給の携帯端末ばらまいて、こっちに来る前に一斉起動させてあたかも我々が居るように見せかけてしまったので…」

ＨＧが照れたように言うと、

「何だと！」

ＨＧの言葉に驚いたＳＲ大尉とＯＪ少尉。

「案の定、それに引っかかった正規陸軍の車両が数台核施設に向かっていくのを目撃しています」

「「へぇー、そんな事が出来るんだ！」」

とＳＲ大尉とＯＪ少尉は感心した。

●ＨＧの秘策

「では、逆にお尋ねしますが、核施設の奪還作戦の訓練時には、核施設に居るテロリストの

数をどのくらい居ると想定していますか？」
ＨＧが言うと、
「いい、質問だねぇ…、我々の日頃の訓練では核施設に１００人のテロリストが潜んでいる事を想定して訓練している」
「即答ありがとうございます。私が思うには核施設確保に１個小隊、ＭＯＸ燃料運び出しと輸送に１個小隊が必要と考えています。まだ、ＭＯＸ燃料の運び出しができていないでしょうから、まるまる２個小隊６０人が核施設に居ると思います。それをどの位の海兵隊兵力で制圧・奪還できると考えてますか？」
「訓練では、陸側の正規陸軍１個大隊で核施設を包囲し、突入部隊の正面の入り口から正規陸軍１個小隊と海側から我が海兵隊１個中隊で制圧・奪還する事を訓練している…正規陸軍があてにならない場合は、２個中隊で十分制圧・奪還できる」
「…と言う事は、この基地に居る海兵隊１個中隊の兵力はまるまる余りますね」
「そうだが…なにか？」
「私は強襲揚陸艦が自由に外海に出て本来の上陸作戦を行えば、１個中隊で半島北側の海岸の敵を制圧できると思います。ＳＲ大尉がおっしゃるように、残りの２個中隊で核施設の制圧・奪還に振り向けますね」
「ふーん、そうなるねぇ…しかし、強襲揚陸艦は内海入り口の機雷のせいで外海に出られん」
「そこで、私はある作戦を提案しようと思いますが、いかが？」
ＨＧは悪戯っぽい目をしてＳＲ大尉を見る。
「面白い！話を聞こうか」
ＳＲ大尉は膝を乗り出した。ＨＧが
「いま、Ｆ県領地北の海岸に味方の艦はいますか？」
「はい…味方の巡洋艦が張り付いています」

とＯＪ少尉が答える。
「巡洋艦に、Ｃ国の兵士の使用する通信機の周波数帯域××ＫＨｚ付近ならびに×□ＫＨｚ付近と正規陸軍が使用する通信機の周波数帯域△△ＫＨｚ付近に通信妨害は可能ですか？」
「可能ですね」
ＯＪ少尉の即答にＨＧは
「では直ちに行ってください」
「…わかった」
ＯＪ少尉は後ろに控えていた兵士に指示を出す。ＨＧは話を進める。
「まず、外海入り口の機雷を敷設している犯人ですが、多分敵の潜水艦では無いのでは…」
「ほう…どうしてそう思う？」
ＳＲ大尉が尋ねる。
「もし、潜水艦がＣ国のモノとして、狭い半島の入り口で機雷敷設作業するには現代の外洋型潜水艦では大きすぎて操艦が難しいと思います。また小型の潜水艦では外洋は波が粗くてこちら（皇国領）まで来られません。また外洋型潜水艦に特殊潜航艇の類を搭載してこちらで分離し機雷を敷設する事も考えられますが、機雷を敷設している箇所は、地元の漁船の船長に聞いたら、海面下では外海と内海を出入りする海流が激しいそうで、特殊潜航艇では無理だと思います。ですので、機雷敷設専用の工作船を搭載した特殊な潜水艦の可能性が考えられます。
先程ＯＪ少尉の話では、内海入り口に居た不審な潜水艦は、駆潜艇に追われて沖に逃走中との話ですが、それがその潜水艦と考えられます。
私は多分、潜水艦は工作船に機雷を補充するため、ならびに…いやもしかすると核施設に居る敵兵を回収するために戻ってくると思います。まずはそれを捕まえます。Ｃ国の海軍が

使用する通信機の周波数帯域×□ＫＨｚ付近を妨害すれば尻尾を出すかもしれません…」
ＨＧは一旦話を区切り、一息つくと
「敵の機雷敷設艇をつぶして機雷を掃海すれば、強襲揚陸艦は外海に出られますね」
ＨＧの話を聞いて、ＯＪ少尉が頷く。
「そうだな」
ＳＲ大尉も同意する。
「核施設に居る敵は、強襲揚陸艦の姿を見て戦闘配置につくでしょう。同時に北の海岸にいる味方に通報するはずです…しかし、北の海岸の兵達には電波妨害で聞こえません」
「そうだな」
「強襲揚陸艦は、そのまま核施設の横を通り過ぎて外海に出て北の海岸に向かいます」
「ふむ…それから」
「北の海岸で上陸作戦を行います…それも１個中隊で」
「１個中隊だと？」
「はい、それに理由があります」
「なんだ？」
「他の２個中隊は、核施設の制圧・奪還をしていただきます。タイミングは強襲揚陸艦が北の海岸沖に到着した時です」
「ほぉー」
ＳＲ大尉は上体を反らして言う。
「北の海岸の敵は、味方の巡洋艦の妨害電波により、今まで入って来た核施設からの情報が入りません」
「それで」
「先に核施設の制圧・奪還を行い、続いて北の海岸の制圧を行います」

「なるほど」
「そのタイミングで、海岸のこの辺…」
ＨＧはＦ県領地の地図を指して、
「この辺で大きな音…銃声とか鬨の声とか…をあげて疑心暗鬼に陥った敵を海岸から海に追い出します。そこを強襲揚陸艦からの海兵隊で殲滅できればと考えます」
「なるほど、その海岸側の大きな音を立てる勢子役は？」
ＳＲ大尉が方眉を上げてＨＧに尋ねる。
「及ばずながら、弊社が行います」
ＨＧはＳＲ大尉を見据えて答えた。
「おまえがぁ？」
ＳＲ大尉がＨＧを軽く指差し言う、ＨＧはそれを意に介さず
「タイミングが重要なので、核施設を制圧した海兵隊員が海岸まで到達するのには時間がかかりますね」
「うーむ、そうだなぁ…」
ＨＧの説明にＳＲ大尉も困り顔で頷く。そこでＨＧはすかさず。
「そこで、もう一つ提案！」
ＨＧは、ＳＲ大尉に向かって人差し指を立てた。
「なんだ？」
「私達の任務であるこの基地対岸の温泉地に居るはずの大臣と大使の保護に１個小隊貸していただければ、弊社が大臣と大使を保護した後の海兵隊員が北の海岸に向かうと…」
ＨＧが海軍基地対岸の温泉地を指すと、そこからは北の海岸に行くのが核施設から行くよりはずっと近いことがわかる。それを見たＳＲ大尉は思わず
「あーーーー！」

と言った。そして、笑いながら、

「おまえ…とんでもねぇ策士だな。ここからボートで対岸の温泉地に上陸して大臣と大使を保護してから、核施設と北の海岸に兵力を振り向ければ、ほぼ同時に両方を抑えられる…よく考えたものだ…気に入ったぜ！ガッハハハ！」

ＳＲ大尉は左手で膝を叩きながら右手で自身の額を抑えて豪快な笑い声を挙げた。一通り笑った後、ＳＲ大尉はＨＧを下から睨むように見つめて、

「お前さんの策に乗ってやる！ただし、対岸の温泉地に上陸させる海兵隊は、１個小隊は無理だな…２～１個分隊が関の山だ！それでいいかな？」

「お貸し願えるのであれば、それで十分です」

「…ところで、〝足（兵員輸送の車の事）〟はあるかい？」

「向こうにはトラックが２台あります…今は山間部に隠してあります。それに１台はこちらの一隊を乗せて北の海岸の浜辺へ向かわせますから、実質１台です」

ＨＧはＨＹの軽ワゴン車の事は言わなかった。

「１台か…足りんな…向こう（温泉地）で徴用するか…いずれにせよ、ＨＧお前さんに貸せる兵力は２個分隊だ！おい、ＳＬ！！」

「はい」

「お前の中隊から２分隊割いてくれ、分隊の指揮はＳＬ自らとれ。対岸についたらここにいるＨＧの指示に従え、残りは俺と共に核施設制圧・奪還を行う」

「ハッ！」

「ＬＲ！」

「はっ」

「お前の中隊は直ちに強襲揚陸艦に乗船！攻撃目標は、Ｆ県領地半島付け根の海岸の浜辺」

「ハッ！」

「ＣＲ！」

「はい」

「お前は俺と共に、核施設の敵制圧・奪還を行う。日頃の訓練通り、この基地からゴムボートで核施設に上陸する」

ＳＲ大尉はテキパキと指示を出す。

ＨＧはＯＪ少尉とＳＲ大尉と携帯端末の番号とメールアドレス（あくまで両者個人用）の交換をした。そして大臣と大使の捕獲の作戦、Ｆ県領地奪還の作戦の詳細と必要補給物資について話し合った。

その後、ＳＲ大尉はＨＧと握手して

「おい、ＨＧ。この作戦が無事終わったら、一杯奢らせてくれ！そこのねーちゃんも一緒に」

ＳＲ大尉は鍛えた腕でＨＧの首に回して、嬉しそうに言った。

「いいですね」

それを聞いたＹＭは『ねーちゃん…』と呼ばれた事と、またＨＧの話に圧倒され、全く話をしていないＹＭは唖然としていた。

海軍基地でとりあえず必要な装備・武器弾薬と食料の補給を受けたＨＧ。海軍から借りたトラックを運転しているＹＭは、興奮して「先輩、お見事です！」と言った。そんなＹＭに対して「そこの家電量販店に寄ってくれ」と言った。

ＹＭは「何か買うのですか？」と訊ねると「うん…ちょっとね」と言ってＨＧはニヤリと笑った。

●ＨＧとＩＦの仲

ＨＧ達が漁港に戻ると、ＩＦは、行きは徒歩なのにトラックで帰って来たのに驚いて、トラックから降りてきたＨＧを出迎えた。ＨＧは出迎えたＩＦの横を通り過ぎながら、ＩＦの肩をポンと叩き

「海軍さんとの話はついた。協力してくれるそうだ。ただ…」

「ただ…？」

振り返って訊ねるＩＦに

「海軍さんも世間体とメンツってぇもんがあって、基地から軍艦１隻も貸してもらえなかった…ハハ、あったら楽なんだけど…」

とそのまま後ろ姿で笑って言った。それを後ろで聞いていたＹＭは「先輩…味方にハッタリ言って、どーするのよ！」と突っ込みを入れていた。

「当たり前でしょ！しみったれの海軍ですもの…で、何かくれたの？」

ＨＧもＨＧだが、目の前のトラックの荷物を見ながらＨＧの冗談に切り返すＩＦ…

「とりあえず、装備・武器弾薬と食べ物恵んでもらった…腹減っているだろう。皆にひもじい思いをさせているからね」

と自ら通り過ぎたＩＦに振り返ってトラックの荷台を指さして言う。

「ありがとーー、お父ちゃん！いつもすまないねぇー」

わざとらしく言うＩＦ

「それは言わない約束でしょ」

と言って、お互い笑った。この息の合った夫婦漫才…何度か見てきたが、今回はほのぼのネタ

「それっ、子供たち…おいで、お父ちゃんが海軍さんから食べ物貰ってきたって！」

ＩＦが隊員達に言うと、ＨＧとＩＦのやり取りを遠巻きに見ていた隊員達は

「「わーーい」」

一部の部下は、この夫婦漫才のノリで駆け寄ってきた。

「人数分あるから、欲張るんじゃないよ」

それぞれ、海軍から配給のサンドウィッチを食べている隊員達を他所にＨＧは港の係留柵に腰掛けてパイプを吹かしながら、対岸を双眼鏡で見ていた。珍しく戦闘服を着たＨＧ…その姿は、まるで戦争映画で特殊部隊が戦場に赴く前の様なシーンである（事実、そうなんですが…作者）。

そこにＩＦがサンドウィッチの入った箱を持ってＨＧに差し出す。

「渡海は、夜間がベストだろう…、こちらから見えるということは、向こうからも見えるということだ！」

ＨＧは双眼鏡を離して対岸のＦ県領地を見たままＩＦの差し出したサンドウィッチの箱から一つを取り出し口に入れた。

「半島から人を出さないことで、情報の封鎖をしているのだろう…今の時代、そんな事しても情報は漏れるのに…」

と言ったところで、水分を含まない口でサンドウィッチをほおばったので、ムセた。それを見たＩＦ「ほら…口に食べ物を入れたまましゃべるから…」と言って、自分の持っている紅茶の入った紙カップを差し出す。ＨＧは紙カップを受け取り遠慮なく紅茶を口に含む。落ち着いてから「わりぃ…」と紙カップをＩＦに返す。

「人員は、戻ってきた人数の半分…元々地元のＹＭとＹＭの部下達…二人ケガしてるのと、事務屋さんを除いて６人とＨＹと俺で…Ｆ子ちゃんは自分の部下で１分隊選抜して、これで１７人…一回ですむ」

…民兵会社の戦闘集団単位は８人１チーム…別名〝分隊〟、〝分隊〟が３セットで〝小隊〟、〝小隊〟が３、４セットで〝大隊〟…それ以上は民兵会社の予算の都合で組織できな

い。ちなみに正規陸軍と海兵隊は１０人１分隊の編成。
と真剣な表情で言うＨＧに
「Ｆ子ちゃん言うな！」
笑いながらＨＧに突っ込みを入れて、ＨＧの横に座る。
「逆上陸したら、来た道を戻って、山の中の以前いた場所に向かう」
「なんで？」
ＩＦも自分が持ってきたサンドウィッチを一つ取り、口に運ぶ手を止めてＨＧに聞いた。
「トラックとＨＹの軽ワゴンがあるでしょーが、徒歩であの広い半島を駆け回るつもり？」
ＨＧは「(なにを今更…)」と言う体で答える。ＩＦはサンドウィッチを口に入れ、咀嚼してさっきＨＧに渡した紙コップの紅茶で胃に飲み込んだ後、
…これ、ＨＧとＩＦは長年民兵会社での戦友であり、何度か現場で一つのカップで飲み物を分け合った過去があります…それ以外でも、飲み屋で同じことしていた…(笑)ですので、お互い無意識です。
「こちらの兵力減はどう補うの？」
心配そうにＨＧに訊ねる。ＨＧは素っ気なく
「海軍さんに海兵隊員を借りた」
と言うと、ＩＦはＨＧの膝に手を乗せ、体まで寄せて
「えっ？…ＨＧ、あんた何やったの？」
驚くＩＦに対して、ＨＧはシレっと
「…なぁに、海軍さんにＦ県領地でこちらが調べた事と、推理した内容を洗いざらい話したら、海軍さんはＦ県領地で起こっている事は、陸軍だけじゃ解決できないことが分かって協力してくれる事になったんだ」
「へーぇ、そうなの！」

ＩＦはＨＧの膝に置いた手を戻す。
「だからこれから向こうで行う作戦は、海軍さんと共同作戦になる」
真面目に話すＨＧに
「…と言うことは、海軍さんからお金貰えるの？」
とワクワクしてＩＦは聞いた。ＩＦの質問は、民兵会社の企業体質である。
「いんや、こちらはあくまで本部からの要人警護の業務の範疇に留める…それ以上は無理！従ってお金はもらえないよ」
ＨＧが茶化して言うと、
「…なーんだ、働き損？」
ＩＦは残念そうな顔をした。
「お金はもらえないけど、戦力と武器・装備はただで貸して貰える…その分、こちらもお返しするから、それでチャラ」
と言って、ＨＧはおどけてみせた。今度はＩＦが真顔で
「ふーん、こちらが損することはないのね？」
「人的被害はないと思う…一番の鉄火場は海軍さんが引き受けてくれるから」
「鉄火場って、どこ？」
「核施設と北側の海岸…こればかりはたった１７人じゃできないからね。ただ、北側の海岸はこちらも加勢しないと…」
「どうやって？」
ＨＧは遠くを見て、
「古来の兵法で言う〝見せ勢〟を使う」
と格好をつけて言った。
「…ああ、歴史ものの映画とかテレビで少ない兵や地元農民が山中に潜んでいて、敵が来る

といきなり大声出したり、音出したりして、敵に大勢いるように見せかける奴？」

ＩＦが言うと、

「そう、それ！」

ＨＧはいきなり、ＩＦに向いて指さして言った。ＨＧの指にのけぞるＩＦ

「あれ？でも、それってこれから加勢してもらう海兵隊さんでもいいんじゃないの？上陸して大臣と大使を確保したら、その足で北側の海岸行ってもらって、海岸の裏山から逆落としに攻めて貰えば沖の海軍さんと挟み撃ちにできるのでは？」

ＩＦが疑問に思って質問すると、ＨＧは困ったように（ＩＦはあの海岸を見てないからなぁ…）と思い出し。

「それができたら、一番いいんだけどね…海岸の裏山と海岸側への傾斜はほぼ垂直に近い崖でね。車で入っていける道は一本しかない…幅の狭い二車線道路がね…それで敵さんＭＯＸ燃料積み出し先として目をつけたんだろうけど…そんな崖を下って敵陣を攻めるのは、大昔の武将が少数の兵を使って一気に崖を逆落としに駆け下り敵陣を制圧したってぇ話が歴史にはあるけど、今ではそれを疑問視する歴史家が多いらしいよ。それに…」

「それに？」

「この作戦はタイミングが大事なんだ、海軍さんは核施設の奪回を主として北側の海岸は従としている、加勢してもらう海兵隊さんは、俺らが大臣と大使を確保したら、ＹＭの居る北の海岸に向かってくれるそうだけど、間に合うかどうか…」

「…そうね」

ＩＦは納得して言った。

「核施設を奪還してそのあとで、海岸に居る敵さんがＭＯＸ燃料奪取が不可能な事を知り、計画断念・戦意喪失したところを抑える…って、海軍さんが言っていた」

「そのための〝見せ勢〟…」

「うん」

ＨＧは自分が考えた作戦とはＩＦに言わなかった。

●細工と仕掛け

午後、向こう（Ｆ県領地）に渡る船を探していたＨＧは丁度Ｏ県領地の漁港にこちら戻ってくるときにお世話になった中型漁船が係留されたまま（燃料補給していた）になっているのを見つけ、ＨＧは再びお世話になろうとその旨船長と話をして、合意に至る。向こうに渡る算段を船長と打ち合わせる。

船長の話では、Ｆ県領地の漁協と対岸のＯ県領地の漁協間で敵の巡回のスキをついて、数隻の漁船で支援物資や逃亡者を隠れて輸送しているそうだ。「中には堂々と灯火着けて航行して居る奴もいる」と言って、船長が指さす先…位置は核施設の沖くらいか…

それから、Ｆ県領地に事件があった日からＦ県領地の港に設置している船舶航行監視用レーダーは機能していない様だとの話を聞いた。

「意外と、連中海まで監視の目が回っていないようだ…」

ＨＧはふと思いついて、メモ帳の一ページを破ってそれに何かを書き込み、そのメモを残留組のＹＭの部下に渡し、海軍基地のＯＪ少尉を訪ねる様に指示した。

食事後、埠頭で作戦会議。再上陸組全員で円陣を組んで座る。

ＨＧは海軍から支給された武器・弾薬を隊員達に配給する。

「いいか、拳銃弾、小銃弾は、対テロ用の強化ゴム弾だ。狙ってもなかなか当たらないから、撃つときは自動小銃・単機関銃はフルオートでバラ巻くように撃て。これと、実包のマガジンとは別々のポーチに分けとけよ！擲弾・散弾もゴム弾だから、使用する時は至近距離で撃つように…あと、スタンガンを使用する時は自分が感電しないように。それから、次に配給

する手榴弾は対テロ用の閃光弾と催涙弾、音響弾とスモークだ…いずれも殺傷能力はないが、間違って近距離で使用すると自分が巻き添えになるぞ」

「准尉」

「なんだ？」

「敵は？」

「敵は…、温泉地に居るのは多分、Ｃ国の兵隊…撃ち殺したら国際問題…あと、大臣と大使という肩書の〝狸と貉〟に流れ弾が当たっても、死ぬこたぁないだろう…」

「「ハハハ…」」

ＨＧは先程ＩＦに説明していた作戦内容を詳細に伝えた。その後で、

「ＹＭ」

「ハイ」

「例のモノは？」

「はい、こちらに」

ＹＭが持ってきた弾薬箱の中に、Ｓ県領地のナンバープレート（Ｆ県領地の車は、運輸局がＦ県領地にないので、隣のＳ県領地のナンバーを使用している）が入っていた。

「トラックのナンバープレートをこいつと入れ替える」

「道交法違反では？」

ＩＦが質問する。

「なにをボケてる…向こうは戦場だよ、そんなこと関係ない、なにしろ敵は街の監視カメラと街道のナンバープレート読み取り装置を抑えてるんだから…他県領地のナンバープレートでは、目立つから簡単に追尾される。向こう（Ｆ県領地）からこっち（Ｏ県領地）に来る時、街道でＦ県領地の正規陸軍の兵隊を乗せたトラックが慌てて核施設の方に向かってす

っ飛んでいくとこ見ただろ…あれは、行きはトラックのナンバープレートをそのまま（帝都ナンバー）にして、帰りはナンバープレートに細工してナンバーを読めないようにしたので、我々が核施設に留まっていると勘違いしたんだ」

「それと、ＹＭ」

ＨＧがＹＭに合図するとＹＭは部下に

「ハイ、持ってきてくれる？」

ＹＭの部下がＨＧの使っていたのと同じ小型ドローンの真新しい箱を５個持ってきた。

またヘッドマウントディスプレイの箱も３箱あった。

ＹＭはＨＧがドローンを使用するのを見ているが、ＩＦは初めてなので、

「何これ？」

と反応をした。ＨＧはＩＦに対して

「見ての通り、小型ドローンとヘッドマウントディスプレイだ…向こうでの行動中に何度か利用したが、こんなおもちゃでも、途中遮蔽物がなければ２０メートルの範囲をカバーできる。また、小さいから操縦になれれば、狭いところに入ることができる」

「そんなに？」

「この前、テレビで海外の戦場でドローンが兵器として使われているのを見てね、いやはや…ＩＴの進化って恐ろしいね…それにこの小型ドローンとヘッドマウントディスプレイのセットはそれぞれの接続先がパソコンじゃなくスマートフォンでも使えるってんだから…」

「それは、すごいですね…先輩！」

ＹＭは、わざとテレビの深夜の通販番組調に言った。

「そうだろー、ＹＭ！」

ＨＧもＹＭのノリについていく。

「それで、操縦はスマートフォンの画面で？」
ＹＭがＨＧに白々しく聞くと、
「いやいやーー、さすがにそれは無理だなぁ…ほら、ＹＭ見てごらん、小型ドローンの箱に操縦桿が入ってる」
と言って、ＨＧはドローンの入った箱を空けて、ドローンの下にある操縦桿を取り出した。
「まぁ…こんなに小さくて…大丈夫なの？」
「だーいー丈夫さＹＭ。こんなにコンパクトでも、操縦は至って簡単！なんたって新開発のジャイロ搭載で常に安定しているんだ！」
「あらぁ簡単なのね」
「だろ、こんなにコンパクトでも一回の充電で２時間は使えるって…それに充電は専用の充電器だけではなく、乾電池でも可能だから野外でも楽しめる…」
「まぁ、野外でも楽しめるのね」
「それだけじゃないよＹＭ！小型カメラを搭載していて、このヘッドマウントディスプレイを使用すれば、自分が飛んでいる気分になれるんだ…それに、ここにスピーカーとマイクがあるから、ドローンから音楽を流して、同時にＹＭの素敵な歌声を聞いたり、踊りが録画できるんだ」
「まぁ…素敵！でもそんなに機能が豊富で、先輩、お高いのでは？」
「それが今買うと、ドローンとヘッドマウントディスプレイのセットで×万皇園（皇国の通貨単位です。作者注）を今なら、△万９８０皇園！」
「えーー、安ぅーい！」
ＹＭとＨＧの即興に唖然とするＩＦに対して、ＨＧは真顔に戻り、
「夜になるまでに、こいつらをセットアップしてしまわないと…できれば操縦訓練もしたい」

と言って、ＨＧはＴＹの方を向き、また円陣の外から、物欲しそうにのぞき込んでいるＩＹを見上げ、

「ＴＹ、ＩＹお前らこういうの得意だろ？ＨＹに教えて貰いながらやってくれ」

「はい」「ハイ」

ＩＹは嬉しそうに返事をした。ＴＹは返事してＨＹを見る。ＨＹは無言で頷く…ＨＹは「(こういう事のために、ＴＴを返して私を残したんだ…)」とＨＧが期待する自分の重要性を感じた。

「で、ＹＭとＦ子ちゃんは、俺と操縦訓練…いい？こいつらが生き残るための眼になるからね」

と言って、ＨＧはＩＦ、ＹＭを指さす。

「わかったわよ！Ｆ子ちゃん言うな！！」「了解しました。先輩」

ＹＭとＩＦは、新しく買ってきたヘッドマウントディスプレイのセットアップが終わるまでＨＧの使っていた小型ドローンとヘッドマウントディスプレイを使用して操縦訓練を始めた。

日没。既に装備は船に載せてある。ＨＧはＩＦ、ＹＭと共に再度戻る隊員達に対して、訓示をした。

「いいかぁーお前ら、折角命からがら海を渡ってこっちに戻って来たのに、また海を渡って対岸に行かなければならない諸君。これから狸と貉の捕獲に出発する！…一方ここに残る諸君は、俺達が無事帰ってきたら、狸と貉を煮込む鍋を用意してくれぃ！」

ＨＧの演説をＹＭの部下の一部を除いてニヤリと笑った。笑った人はＨＧの比喩が理解できていた。

「では、乗船！」

再度半島に向かう選抜隊１７人は、船に乗り込み漁港を離れた。港には残ることになった隊員が手を降っていた…

漁港の防波堤を出て船がある程度進んだところで、船は灯火管制に移った。行く先のＦ県領地側の敵に見つかったら、下手するとロケット弾攻撃とかの洗礼があるかもしれない。

ブリッジで暗視装置の付いたスコープを装着したロングレンジ狙撃ライフルのバイポッドを展開して傍らに置いて警戒しつつ、ＨＧは船長と会話をする。

船長は「ほれ、あそこに堂々と灯火着けて居る奴が」と言って、船長が指さす先には確かに灯火をつけて航行している船らしき姿が見えた。やはり位置は核施設の沖くらいか…ＨＧは「(多分…あれが工作船だろうな)」と思った。

意外とあっさり対岸の漁港について、拍子抜けしたＨＧ一行。漁港周辺の敵側の巡回が来ていないのを地元の漁港からの合図と暗視装置のゴーグルとロングレンジ狙撃ライフルの暗視装置の付いたスコープを使用しての索敵で確認すると、船長から「あんちゃん、いいもの持ってるね」と言われた。

ＨＧは船長に、暗視装置を渡して「遠望はこれ（暗視装置の付いたスコープ）より効かないが、使います？」

と、ＨＧはロングレンジライフルを叩いて言った。

「おぅ、できれば使いたいねぇ」

「じゃ、お礼に貸してあげます…もっとも、海軍さんの備品だから、この度の騒動が収まったら、返してもらいますが…対岸に居るウチの隊員に渡してください」

「いいのかい？あんちゃん！」

「はい」

…ＨＧは暗視装置のゴーグルを船長に渡した。

船を降りると、漁村の外れの小屋から何人かの人が船に向かって来るのが見えた。どうやら、この人達は対岸のＯ県領地に脱出する人らしい…ＨＧ一行と入れ違いに、脱出する人達を乗せると、船はすぐに出港した。

●ＩＹ

ＨＧは暗闇で顔がよく見えないので、点呼を取る事にした。

「番号！」

「１、２、３…１５、１６、１７」

…おかしい？自分を含めて１７人のはずなのに、ここには１８人居る…（ＩＦとＹＭも点呼に応じている）

「誰だ！密航者は？」

ＨＧが怒鳴ると、周りの隊員達がざわついた。ＨＧは持ってきた暗視装置を船長に渡したばかりなので、予備の暗視装置を積荷から取り出さずにポケットからＬＥＤライトを取り出し、一人一人に向けた。すると、隊員中に居るはずのないＩＹが居た。

「ＩＹ、お前か！」

「はい、准尉ゴメンナサイ！！」

ＩＹは俯いた。ＨＧ達を乗せてきた船はもう出港してしまったし…どうするか…

「ＩＹ！」

「ハイ！」

「残れと言ったのに、なんで付いてきたか？理由を言え！」

「ハイ、ドローンのセッティングと操作に人員が必要と考え、准尉の命令に背いてついてきました」

「ヨシ！」

ＩＹはＨＧが怒っているものと思い、俯いたままついてきた理由を述べた…実はＩＹがついてきた理由には別の理由があったのであるが…それを聞いてＨＧが「ヨシ！」と言ったのが聞き取れなかった。彼女の左耳の難聴のせいと、彼女が委縮していたからである。

ＩＹがなにも反応していないので、ＨＧはＩＹの難聴のせいかと思った。しかし、ここでＩＹの難聴の件を持ち出すと、無理にでもＩＹを対岸に返さないとならない…そんな時間の余裕はないので、ＨＧは

「ＩＹ！何を委縮している。隊に加わることを許可する」

と再度ＩＹに聞こえるように言った。ＩＹはこの時、ＨＧが怒っていないのと、自分の難聴について黙ってくれていることを知った。

「ハッ、ハイ！ＩＹ、隊に加わります」

と返事をした。ＩＦはムッとしていた。

「さて…来た道を戻るかね」

とＨＧは軽口をたたきながら、「前進！」と言った。

●海軍基地

海軍基地では、司令部内で情報部と高官達が話をしていた。

ＯＪ少尉がＨＧとの話の議事録を説明していた。部下をＦ県領地との県境に派遣し、展開しているＳ県領地とＯ県領地の駐留正規陸軍の様子を見に行かせたら、正規陸軍が県境で先に進めない理由が判明したからである。

県境の向こう側に味方であるはずのＦ県領地の駐留軍が居るので、同士討ちを避けて動こうにも動けないのである。

海軍は陸の正規陸軍との連携をやめ、Ｏ県領地海軍基地独自の動きをする事に決しつつ

あった。

そこにもたらされたＹＭの部下が持ってきたＨＧのメモ。

ＨＧのメモには、簡単なＦ県領地の地図と重要施設の場所が図示されていて、下にメモが走り書きされていた。それによると、『Ｆ県領地とＯ県領地の間にある内海に対して、Ｆ県領地にある港の船舶航行監視用の水上レーダーはテロリストに抑えられていると思われるが、操作ができないのかレーダー波の照射を感知されず。従ってテロリストの監視は陸からの目視のみであり、内湾の航行の自由は確保されている模様…事実、核施設の沖合には、灯火をつけて航行する船舶あり。』と…

それについて、ああだ、こうだと議論しているのである。正規軍には統制の規律があり、独断で動くには帝都の軍令部や参謀本部の許可が必要と考えているからである。その点、民兵会社は部隊の独自判断で臨機応変に動ける。

●反撃開始（ＨＧ逆襲）

前に居た山中からの撤退ルートは緊張したが、今度は来た道を戻るため、ＨＧは地図に書き込まれた監視カメラの位置を難なく避けて進むことができた。ただ、帰りにはなかった擲弾ランチャー、ロングレンジ狙撃ライフを担いでいるのと、海軍基地から借用した対テロ用の装備・弾薬等、山中に入るのでその分行動速度は遅くなる。それでも、対岸で十分な食料にありつけた隊員たちは嬉々として進軍する。

ＨＧは難なくトラックとＨＹの軽ワゴンを手に入れると、早速トラックのナンバーを付け替え、全員に作戦についての意識合わせを始めた。

「今回の作戦。かなり厄介なものになるがそれはどうしてだ？」

ＨＧ准尉〝親父モード〟の真骨頂。

「はい、敵が友軍とC国の兵隊であるからです」
「そうだね。他には？」
「はい、C国の兵隊が北の海岸と核施設の二手に分かれていて、この人数では攻略できないからです」
「他には？」
「核施設のMOX燃料を核施設から出すことを未然に防がないと大変な事になるからです」
「大変なこととはなんだ？」
「MOX燃料を破壊されると、我々を始めF県領地の一般市民が核に汚染されるからです」
「…その意見、大変よろしい！でもまだあるぞ！他には…」
HGは周りを見渡すが、意見が出せない様子…HGは促すように
「他には…ないか？」
と少し怒声を混ぜて言った。すると隊員の一人が恐る恐る。
「今の話、やはり我々では任務遂行が難しいです」
HGはその意見を否定するでもなく、肯定するでもなく、受け入れた。
「振り出しに戻ったね。そうだ、そこで海軍から海兵隊の増援をいただくことにした」
HGは再度、O県領地の漁港で話した作戦を思い出すよう促した。すると、
「では、正規陸軍とC国の兵隊は海兵隊にお願いする事にして、我々はその作戦が円滑に進むよう支援し、我々の本来の任務である大臣と大使を警護することです」
HGは（思い出したな…）とニンマリと笑い、畳みかける
「それだ！でも、大臣と大使は今囚われの身だ」
「はい、我々は、囚われの大臣と大使を敵の手から奪還して確保する事です」
「そう！…でもこの場合は、〝大臣と大使の捕獲〟だ」
とHG言うと、一同笑った。

「では、それを行うにはどうすればいい？」

ＨＧが再度訊ねると、隊員達から色々な意見や質問が出てきた。

ＨＧはこの会話を交わすことで、各隊員の認識の共有と単に命令に服従することなく自ら考えて話し合い、一体感を持ち行動する事を教えている。

これが前の会社で日和見保身内密主義の上層部から一番嫌われていた理由の一つである…他にも色々あるのだが…

ＩＹは配属先のＳＳの部隊では、ＳＳから指示があり指示を全うするためにはＳＳと話をしないでネット等で調べて結果をＳＳに報告するだけの服従の日々を送っていたので、ＨＧと部下達の掛け合いみたいな議論の感覚についていけなかった。そこで、ＨＧはＨＹと共にＩＹを議論に巻き込むため、しばしば質問を投げかけ参加させていた。

ＨＧのこの話合いでの意思疎通の方法…ＩＦの部隊でもＨＧのやり方を真似たような事が行われている。ＩＦも教育者であり本部ではＨＧの教育資料をＨＧから入手しているが、自分の部下だけにしか行っていない。ＹＭは市街地で情報収集した時に、ＨＧの話し合いを経験しているので、ＹＭの部下に対して発言を促すよう先導していた。

ここの場では、もはやＩＦの部下、ＹＭの部下と言った区別がない…ましてや、ＩＦ、ＹＭ、ＨＹと部下達の上下関係もない、皆ＨＧの下で一体になっていた。

たどたどしくもＩＹも意見やアイデアを出す。間違っても、叱られるわけではなく、出された言葉は肯定され歓迎される。出した言葉に別の言葉が出るが出した全部が否定されることはない…アイデアは発展するし、間違いは自分自身で補正・修正そして是正される。そして、それが自分自身の行動目的となり、自己責任で行動するための指針になる。

ＩＹはこの論戦が面白くなってきた。次第に自ら手を挙げて積極的に議論に参加する。
やがて、意見が出尽くし、アイデアが一つの方向にまとまると、ＨＧは皆に円陣を組ませ、
その中に入り、
「ヨシ！みんなこの作戦の主旨が分かったな？なんだ？」
ＨＧが気合を入れて言うと、
「「今回の我々の任務は、契約の範疇…すなわち、狸と貉…もとい！大臣と大使を生きて捕獲する事！その場合抵抗勢力は極力生かして排除する事です！！」」
「そーだ、後ひとーつ！」
とＨＧが問うと、
「「一部の隊は、兵力を貸してくれた海兵隊に対してささやかなお返しをする事です」」
とＹＭの部下が言った。
「借りたモノは返さないとね」
とＨＧが言うと、別の隊員が
「それは、今後Ｆ県領地支部のためになります」
「そーだ、いいぞぅ」
とＨＧが言ったので、ＹＭはハタと「先輩はそこまで考えて…」と気づいた。
「それから、皆肝心なことは？」
とＨＧが問うと、皆同時に
「「みな無事で生きて帰る事！」」
と声を合わせて返事した。ＨＧは全員を見渡して、
「ヨーシ、その通り！では、では作戦を始めよう」
「「ハイッ！」」

円陣がとかれ、各自自身のすべき役割を果たすために配置につく。
その中でＨＧはＩＹを呼び止め、
「頭がフワフワして、気分がおかしくないか？」
「はい」
事実、ＩＹは自分の立っている両足が地面を捉え切れていない感覚になっていた。
「これでも食べろ、脳みその糖分が減っている証拠だ」
と言って、ＨＧはＩＹにチョコバーを渡す。
その一言がＩＹの心に響いた。撤退時にはＨＧに死に場所を求めている事を自分の身を以て戒められ、借りた愛銃を動作不能にしてしまい、死んで詫びるつもりを諌められ、ここでまた自ら考え意見を交わして他と強く関わり、自ら考えて自己責任で行動する事を教わった。ＩＹはＨＧにもっと色々教えて貰いたいと強く思った。

ＹＭに作戦通り、ＹＭの部下にＩＦの部下２人をつけ、Ｏ県領地から持ってきた軽機関銃、擲弾ランチャー、ロングレンジライフル等の装備の多数を乗せて、トラックで半島の付け根の北側の海岸に向かうよう指示。ＨＧはＨＹ、ＩＹと軽ワゴン車に乗り込み、ＩＦはもう一台のトラックに部下とそれぞれ分乗し、Ｆ県領地の大臣の実家と別荘がある内海の海が見える温泉地を目指した。

●狸と貉の巣穴探し

Ｆ県領地の市街地に続く内湾の街道にあるドライブインの駐車場に軽ワゴン車を止めて、街道を行きかう車両を監視した。

不審な車両どころか、車両の往来が全くないので、ＨＧは軽ワゴン車を大臣の実家と別荘

がある内海の海が見える温泉地に向けて走り出す。
途中のガソリンスタンドが軒並み〝臨時休業〟の看板を出して閉店しているのを見かけた。「ガソリンスタンドを抑えて、人の往来を抑制したか…」とＨＧは感づいた。

温泉地の手前の林に車を隠し、後から来るＩＦのトラックを誘導する。
全員下車すると、
「では、諸君。仕事（要人警護と言う名の大臣と大使の身柄捕獲）の下見に行こうか」
と軽く言った。ＨＧの言葉に全員無言で頷く。ＨＧ達は大臣と大使の居所を特定するため、温泉地の手前で各自消えるように散開した。

温泉地では、普段なら温泉巡りや旅館の浴衣を着た観光客で賑わっているはずなのに、人の姿すら見かけない。敵は温泉地丸ごと占拠しているようだ…「それにしても、巡回の兵すら居ないのはどうしてだろう…」とＨＧは不審に思って、一旦温泉地を離れた。
温泉地の外れにある広場。ＨＧが行くとＩＦ以下数人の部下が居た。ＩＦはＨＧを見つけ、ＨＧを手招きして呼び寄せると
「どう？」
と聞いた。ＨＧは
「どうと言っても、敵さん温泉地丸ごと貸し切ったみたいだぜ」
「そうみたいね…罠かしら？」
「罠なのか、単なる人手不足なのかは、しらんけど」
ＨＧもこの状況が読めなくて苦労している。
その間にＨＹとＩＹも合流した。
「准尉、温泉地の中央の立派な旅館に正規陸軍の兵が数人いますけど」

「「何！」」

ＨＧとＩＦは驚く。ＨＧとＩＦは、人気のない温泉地になにか罠があるかと思って、温泉地の中央に深く入りこむことをせずに、引き返してきた。ＨＹとＩＹは、罠とは思わずに無防備に温泉地の中央まで行った事に驚いたのと、そこに正規陸軍の兵士が居たことに二重の驚きをした。

「行ってみよう！ＨＹ、ＩＹ案内してくれ、ＩＦはここで待機。俺達に何かあったら、今晩来る海兵隊にこのことを伝えてくれ」

「わかったわ」

ＨＧはＨＹ、ＩＹの案内で温泉地の中ほどまで罠を警戒しながら進む。途中、なんの障害もなく温泉地の中央につくと、ＨＹ、ＩＹの報告通り、旅館の前に武装した兵士が数人立っているのを見つけ、身を隠した。

ＨＧは周囲を見回すが、他に兵隊の姿がないので「あそこか？」と思った。ＨＧが旅館を指さすと、ＨＹ、ＩＹは頷いた。

ＨＧはＨＹ、ＩＹの報告通り、旅館を警備している兵たちを見て驚く。ＨＧ達の想定ではＣ国の兵士がここを警備していると考えていたが、実際は正規陸軍の兵が警備をしていた。

ＨＧは「（あれ？首謀者はどっち？）」と思ったが、そんなこと大臣と大使を確保すればわかる事だと、考えるのをやめた。

ＨＧは警備の隙をついて、旅館に近づくと、ドローンを使用して大臣と大使と軟禁されているだろうと思わる建物（旅館）の部屋の場所を突き止めた。

大臣と大使は仲良く酒を片手に葉巻をふかしていた…ＨＧは益々「（首謀者はどっち？）」と再び疑心暗鬼にかられたが、それより二人仲良く酒を飲みながら葉巻を吸っているのをヘッドマウントディスプレイ越しに見たＨＧは「ったく、羨ましい！」と愚痴を言った。

大臣と大使の居場所を突き止めたＨＧは、温泉地に居る正規陸軍の兵士の数を数えた…

旅館の外側に１０人程、中はドローンで見て大体見積もっても１０人…ＩＦの元に戻り、
「狸と貉の居所は突き止めた。後は海兵隊さんたちが来るまでここで待機」と言った。
ＩＦはＨＧの不満げな顔に珍しく「どうかしたの？」と心配げに聞いたが、「狸と貉は楽し気に、酒を飲みながら葉巻吸ってた」とのＨＧの回答に、
「それは、変ねぇ…あんた（ＨＧ）の読みだと、大臣が囚われていて、大使が酒と葉巻吸ってんじゃなかったの？」
「…うーん、そのはずなんだが…、どのみち海兵隊が来たら両方捕獲しよう…それにしても、けしからん！」
と言ったＨＧの不満が、ＩＦは「（単に葉巻と酒が羨ましかったのね…）」と思った。

●海軍の逆襲その１

ＨＧからのメモを分析していた海軍情報課少尉ＯＪ少尉は、ふと『Ｆ県領地とＯ県領地の間にある内海に対して、Ｆ県領地にある港の船舶航行監視用の水上レーダーはテロリストに抑えられていると思われるが、操作ができないのかレーダー波の照射を感知されず。従ってテロリストの監視は陸からの目視のみであり、内湾の航行の自由は確保されている模様…事実、核施設の沖合には、灯火をつけて航行する船舶あり。』の『…事実、核施設の沖合には、灯火をつけて航行する船舶あり』の部分に着目した。

湾内の船舶監視レーダーが稼働していないのは基地からも確認されている。湾内の船舶監視レーダーの運用管理は、Ｆ県領地にある港湾局と海軍で共同運用されており、レーダー管制室が敵に襲われた場合は、海軍軍人が敵に悪用されないよう破壊する決まりになっている。

当然今回の事件は、Ｆ県領地の正規陸軍かＣ国の工作員がレーダー管制室に押し入り、そこにいる海軍兵士が破壊したものと考えられる（ここに武装した正規陸軍が押し入る事自

体異常なので、命令通りに行動した。作者注)。これとは別に海軍は基地にある船舶監視レーダーを使用して湾内を監視しているので、ＯＪ少尉はレーダー管制室を訪れＦ県領地での事件発生前後の湾内のレーダー記録を閲覧した。確かに内湾内で夜間に漁船らしき中小型船舶の往来が事件以降日増しに増えている。

と、同時にＦ県領地の半島突端にある核施設とＯ県領地の間に不審な航路を描いている中型船が居ることに気づいた。その船は日没になるとＦ県領地の核施設付近から出港し、内湾の入り口付近をジグザクに航行したかと思えば、外洋に出て長時間停泊してからまた同じような航路で移動している。その航路は、昼間掃海艇が機雷を掃海した場所とよく一致していた。

「捕まえた！」

ＯＪ少尉は、そう言ってレーダーの記録と掃海艇の航路記録を持って上官のＡＴ中佐の元に報告に行った。

ＡＴ中佐はＯＪ少尉の報告を聞くや否や、ＯＪ少尉を伴い基地司令の元に行く。ＯＪ少尉は機雷敷設をしている不審船の拿捕と海軍独自の上陸反抗作戦。そして、Ｆ県領地の県境の膠着状態を打破する秘策を上申した。

基地司令部はＯＪ少尉の立てた作戦（ＨＧが立てた作戦）に則り開始した。

ＯＪ少尉はレーダー管制室を指揮所として、まずは核施設沖に居ると思われる不審船を叩くべく、水雷艇と掃海艇を数隻現場の核施設沖に派遣する。

「こちらデルタ1、水雷艇戦隊出港！目標、Ｆ県領地の核施設沖、出航後は灯火管制厳守…ただし敵はレーダーを使用していないので、レーダー管制で航行してヨシ！」

『水雷艇アルファ了解、出港します』『水雷艇ブラボー了解』『水雷艇チャーリー了解』

水雷艇が海軍基地を出ていく

「こちらデルタ1、続いて掃海艇出航…掃海艇は核施設沖手前で待機」
『こちら掃海艇了解』
掃海艇が出港する。

「デルタ1より、各艦出港準備。そのまま港内で指示あるまで待機」
『『了解！』』

核施設沖…
「ん？あれか？」
水雷艇アルファは、核施設沖に居る灯火を付けた中型船を発見した。暗視装置付カメラで確認する。
「こちらアルファ、目標海域に目標船舶発見」
『こちらチャーリー、こちらも確認した…見た事の無い船だ』
『デルタ1だ、位置は？』
「指示通りの海域…なんだ？」
『どうした？アルファ？』
「あいつ、外海に向かっているぞ…見つかったか！」
『アルファ、こちらブラボー、それにしても奴さん一向に船足上げんな…』
「そうだな…ブラボー…このまま接近しよう！」
『こちらデルタ1、機雷原に近づいている…気をつけろ！』
「アルファ了解」『ブラボー了解』『チャーリー了解』

O海軍基地指揮所…

ＯＪ少尉は、水雷艇が敵の機雷敷設艇らしき船を発見したので、
「こちらデルタ１、掃海艇前進」
『こちら掃海艇了解』
「水雷艇戦隊に告ぐ、掃海艇を前に通せ」
『こちらアルファ、そんなことしたら奴さん逃すぜ、ここは以前掃海艇が掃除した所を辺りを付けて追うしかない、デルタ１許可願う』
「こちらデルタ１、アルファ無理するな！」
『『無理するな』だってよぉ…どうする？ブラボー、チャーリー？』
『こちらブラボー、こちとら、内海に閉じ込められてイライラしてんだ。ちゃっちゃと拿捕しようぜ』
『こちらチャーリー、同意する。やっちまおうぜ！機雷に接触すればそれだけ味方の通り道ができるってもんだ』
「こちらデルタ１、分かった！注意しろ…なるべく目標の航跡の後を付くようにしてくれ」
『そう来なくっちゃ！…アルファ了解』『ブラボー了解』『チャーリー了解』
『こちらアルファ、俺の後に続け…』『ブラボー了解』『チャーリー了解…女の尻追うようについて行ってやる』
『こちらアルファ…気色悪い事言うな！』『ハハハッ』
水雷艇はほぼ一列に機雷原に突入した。レーダー手の後ろから見ているＯＪ少尉はハラハラしていた。
やがて水雷艇戦隊は、機雷原を抜けた。
「こちらデルタ１、機雷原を抜けた。作戦開始！」
『『了解！』』
水雷艇は持ち前の高速でまるで猟犬が獲物を取り囲むようにして、見事不審船を拿捕し

た。不審船の乗組員はC国の海軍兵だった。また不審船には機雷が積んで無かった。

その報告を聞いてOJ少尉は

「あれ？機雷を積んでいないと言う事は、機雷自体は別のどこかから調達している？やはりHGの言う通り外海に居る潜水艦からか？」

「こちらデルタ1、掃海艇に達する掃海作業開始」

『了解！』

「こちらデルタ1、各艦ただちに出港。機雷原前で待機」

O県領地の海軍基地から、駆潜艇、駆逐艦、強襲揚陸艦が慌ただしく出港していく。

機雷原にいる掃海艇の報告では、既に強襲揚陸艦が通り抜けられる幅は確保できているとの事。

海軍基地を出港した強襲揚陸艦は、掃海艇がマーカーを置いて示した機雷が敷設されていない海域を巧みに抜けて外海に出る。

内海入り口付近の外海では友軍の駆潜艇がいて、海中の不審な潜水艦を追い回していた。そこに強襲揚陸艦の後ろから外海に出てきた駆逐艦、駆潜艇が加勢する。

するとあきらめたか、とうとう潜水艦が浮上した。駆逐艦と駆潜艇の主砲が照準をつける中、潜水艦からは降伏の白旗が上がった。潜水艦の臨検は駆逐艦に任せて、強襲揚陸艦最大船速でF県領地とS県領地が接する狭い浜辺に向かう。途中ソナーが不審な潜水艦の反応を数隻捕らえるが、その対処は後から来た味方の駆潜艇や駆逐艦に任せた。不審な潜水艦は駆逐艦に追われて沖に逃走した。

強襲揚陸艦は目的地の沖合に陣取って、C国の兵士の通信に対する通信妨害戦（ジャミング）をしている巡洋艦隊を見つけ近づく。そのままC国の兵士達を海岸に釘付けにする。

●狸と貉の捕獲作戦

ＯＪ少尉は強襲揚陸艦が内海を出た報告を受けると、次に基地内で待機している一部の海兵隊に、対岸の温泉地への上陸を命じた。

ＳＬ中尉に率いられた海兵隊２個分隊は、基地から暗視装置ゴーグルをつけてゴムボートに分乗して一斉に対岸の温泉地に向かい、上陸した。対岸が砂浜だったことが幸いした。

海兵隊の上陸地点には、ＨＧが待ち構えていた。中隊長のＳＬ中尉は最初敵兵（なにせ味方の正規陸軍が敵ですから）と思い警戒したが、ＨＧだと分かり、ＨＧの上陸地点までの誘導に従った。以後ＨＧの指揮に入った。ＨＧはＳＬ中尉に対して、昼間見た温泉地の話と、大臣と大使の状況を簡単に説明して、段取りの打ち合わせをした。

ＨＧとＨＹ、ＩＦの部下５名と海兵隊員２個分隊２０名、対する温泉地に居る正規陸軍は約２０名…これで戦力は逆転した。

この時、海兵隊の隊員達は正規陸軍の戦闘服を着ていた。またＨＧ達の戦闘服は元々正規陸軍の戦闘服と紛らわしいため、正規陸軍の増援部隊のふりをすることにした。

全員暗視ゴーグルをつけて昼間見つけた大臣と大使の宿泊している旅館に夜陰に交じってヒタヒタと攻め寄せる。途中警戒している正規陸軍の兵士は殺すわけにも行かないので、増援とか交代要員のふりをして近づき、スタンガンで気絶させたりして排除して進んだ。

そして、最後の仕上げとしてＨＧ、ＩＦを交えた突入部隊は大臣と大使の宿泊している旅館に迫った。

旅館の入り口に兵士が居たので、裏口に回り込んで旅館に入る。途中、旅館の従業員に見つかるが、護衛の兵士のふりをして、部屋へ向かった。部屋の前で大臣はＨＧとＩＦ達、大使はＳＬ中尉達と二手に別れたそれぞれ押し入る事にした。

ＩＦが大臣の部屋に入る前に、ＨＧを制して部屋の引き戸をノックした。ＩＦが引き戸を開け入ると、部屋との仕切りにある襖越しにテレビで聞き覚えのある大臣のだみ声で

「誰だ？」

「ルームサービスでございます」
「…頼んだ覚えがない」
襖越しにやり取りが続く、
「あら、そうですか…高級酒をご注文との事で、こちらかと…大変失礼しました」
それを聞いて、大臣は
「なに?高級酒！だったら、こっち、こっち…」
ＨＧとＩＦは「「浅ましいやっちゃな…」」と突っ込みを入れていた。
「分かりました、では入らせていただきます！」
と言った途端、ＩＦは襖をあけ放って、飛び込む。ＨＧが後に続く。
ＩＦは大臣に銃を突き付け、
「大臣、お迎えに上がりましたぁー、ご同行願いますかぁー」
と凄みを効かせた。
二人とも生け捕った。
大臣と大使を温泉地の砂浜に連れて行って、ＨＧはライトを付けて宙に円を描く。
たちどころに対岸の海軍基地から沖に待機していた陸用舟艇が駆けつける。
砂浜に乗り上げた上陸用舟艇のランプが開き、そこにはＯＪ少尉が居た。ＨＧはＯＪ少尉に敬礼して
「では、大臣と大使は保護しましたので、海軍基地に保護願います」
と慇懃に言った。ＯＪ少尉はニヤリとして答礼をすると、
「了解しました。お勤めご苦労様です。大臣、大使閣下こちらへどうぞ…」
ＨＧ達が大臣と大使を上陸用舟艇に押し込めると、直ちに離岸して、海軍基地に向かった。
多分そのまま収監されるであろう。
「ではＳＬ隊長、次の場所に行きましょう」

「そうですね。ＨＧ隊長」

ＳＬ中尉率いる海兵隊員は、ＩＦの運転する民兵会社のトラックと現地徴用したトラックに分乗し、北の海岸を目指す。それを見送ったＨＧもＨＹ、ＩＹ達と共に軽ワゴン車に乗り、北の海岸を目指す。

●海軍逆襲その２

次は核施設を占拠しているＣ国の兵士。

ＯＪ少尉の乗った上陸用舟艇と入れ替わりに、海兵隊隊長ＳＲ大尉が率いる海兵隊員がゴムボートで基地を後にした。

Ｏ県領地の海軍基地に駐留している海兵隊員は、この核施設が他国の兵に占拠された場合の核施設奪還を任務の一つにしていたため、訓練に基づき粛々と核施設の奪還を始める。

ただし、今回は核施設のある海岸に機雷が敷設されているので、掃海艇と不審船を拿捕して、味方の駆潜艇に引き渡した水雷艇に援護され、機雷原を避けてＳＲ大尉が率いる海兵隊は一斉に対岸の核施設付近の海岸に上陸した。

上陸した部隊は、あらかじめ打ち合わせた通り、ＣＲ中隊が核施設の原子力発電施設の中央制御室、ＳＲ大尉とＳＬ中尉の残存の小隊が核施設の核燃料再処理施設に別れて向かった。核施設にはＣ国の兵士が知らない隠し通路がいくつも存在しており、海兵隊は施設を傷つけないように、慎重に進んだ。

３０分程して、ＳＲ大尉のインカムにＣＲ中尉から報告が入った。

『こちら、ＣＲ。中央制御室に敵影無し。１分隊残して、そちらに向かう。オーバー』

「ＳＲだ。敵さんこちらに束になって居やがる…ＭＯＸ燃料運搬車両基地だ！早く応援たのむ」

Ｃ国兵士は、皆核燃料再処理施設に集まっていて、ＭＯＸ燃料を搭載した車両付近でＳＲ

大尉達に対して、抵抗をしていた。
Ｃ国兵士は、ＭＯＸ燃料を背に実弾を使用するのに対して、ＳＲ大尉達は対テロ用の強化ゴム弾のため、距離が遠く、弾丸が届かないので近づきたいが、Ｃ国兵士は弾幕をはり、ＳＲ大尉達は近くの障害物に隠れて前進を阻まれていた。
「くそー、このままじゃ進めん！擲弾ランチャーにスモーク弾装填！合図があるまで待機！残りは、牽制射撃でこちらに注意を引き付けろ」
ＳＲ大尉は、ＣＲ中隊が中央制御室から核燃料再処理施設への地下通路を通ってくれれば、Ｃ国の兵士が集まっているＭＯＸ燃料運搬車両基地の背後に出て挟み撃ちにできる。そのタイミングを図っていた。
『こちらＣＲ、核燃料再処理施設に到達するも、敵兵と遭遇…現在排除中。オーバー』
「了解した。早く頼む」
ＳＲ大尉はＣＲ中尉からの報告に、兵士達を鼓舞した。
「おめーら、もうじきＣＲ中隊が来るから、弾幕はってこっちに注意を引き付けろ！」
「「ハイ」」

『こちら、第二中隊別動隊。ＭＯＸ燃料運搬車両基地に到達！オーバー』
「よっしゃー！今だ、擲弾ランチャーを敵前面に撃て！」
ＳＲ大尉の合図で、一斉にスモーク弾が発射される。スモーク弾で視界が遮られたのを見計らって、
「同士討ちするなよ！突撃！！」
ＳＲ大尉隊が突撃を開始すると同時に、ＣＲ隊の別動隊がＣ国の兵士の背後から襲い掛かる。
ＳＲ隊がＣ国の兵士が立てこもっているＭＯＸ燃料運搬車両基地に到達すると、Ｃ国の

兵士がそれまでの弾幕で殆ど弾丸を使い果たしたため、算を乱して敗走し、背後のＣＲ別動隊とＣＲ隊本体と挟み撃ちに逢い、Ｃ国の兵士達は排除または拘束された。

「こちら、ＳＲ！デルタ１へ、核施設の奪還に成功せり！オーバー」

『こちら、デルタ１。了解した』

核施設奪還の連絡を受け、ＯＪ少尉は外海で待機している強襲揚陸艦に、その旨を伝えた。

強襲揚陸艦は、海岸の裏山に待機しているＹＭに発光弾で合図を送る。ＹＭとその部下達が一斉にドローンを使って大音響で音を鳴らしたり、銃や擲弾筒や機関銃を空に向けて撃ったりして海岸にいるＣ国の兵達を脅かした。

中には、ロングレンジライフルを構えてＣ国の兵士をスコープに捉えて、「隊長、撃ってもいいですか？」と聞く隊員が居たので、ＹＭは「それは、ダメ！」と優しく諌めた。

やがて大臣と大使を確保後のＨＧとＳＬ中尉率いる海兵隊も後から加わり、それが効果を高めた。

外海で待機していた強襲揚陸艦は、ＬＡ中隊の海兵隊を海岸に上陸させると、上陸地点を確保していたＣ国の兵隊はあっさり降伏をした。

捕らわれていた近衛師団の兵士達は、ＬＡ中隊によって救出されたが、死傷者が多く出ていた。

残りはＦ県領地の正規陸軍と警察…

翌日、Ｓ県領地側にいる正規陸軍が幹線道路の県境に築いたバリケードに向けて、皇王自ら録音した音声を流すことで、無血開放する事に成功。Ｆ県領地の市街地に雪崩れ込むＳ県領地駐留部隊の正規陸軍装甲車の旗を見てＦ県領地の正規陸軍の兵隊は誰も手出しできなかった。なぜなら、旗は軍旗の他に皇王旗が掲げられていたのである。

ＨＧはこの話を後にＯＪ少尉から聞いたのであるが、ＯＪ少尉の上官ＡＴ中佐は皇族であるＯ県領地の知事ＯＴ殿下に直接話ができるほどの人で、ＡＴ中佐は最初ＯＴ殿下からＦ県領地の正規陸軍と警察に武装解除を呼びかけていただくつもりであったが、ＡＴ中佐の話を聞いたＯＴ殿下は皇王に直接上奏し、その話に乗った皇王は音声録音ではなくて直接赴こうと言い出したそうだ…それはさすがに周りに説得されたそうだが…皇王の代わりに皇王旗を現地に持ち出すことを許可した。

また、懸念していたＭＯＸ燃料については、ＨＧ達の想像とは違うが、Ｃ国国家ではなく、Ｃ国の反政府組織勢力が生成されたＭＯＸ燃料を使用して核爆弾を作ろうとしたのである。そのために大使は大臣を丸め込み、Ｆ県領地の独立をそそのかし、ＭＯＸ燃料を手に入れたら、後は大臣を切り捨てる予定だったそうだ。

それを後日ＯＪ少尉からの電話で聞いたＨＧは二人で笑った。

●エピローグ

結果、整理しなおすと、この度の事件は外務大臣がＣ国の反政府組織の大使にそそのかされ、Ｆ県領地の独立を画策し、自分の息のかかったＦ県領地の正規陸軍と警察を動員してＦ県領地を閉鎖。

大使はＦ県領地にある核燃料再処理施設にあるＭＯＸ燃料を手に入れてそれを母国Ｃ国に持ち帰り、核爆弾を製造して母国の現政府を転覆させるのが目的。ＭＯＸ燃料を入手した後は外務大臣を切り捨てる考え…と言うことで、外務大臣の皇王に対する反逆と、大使のＣ国政府への反逆。更に大使には他国のＭＯＸ燃料を強奪して核爆弾を製造しようとした国連核開発監視機構の同盟憲章（皇国政府もＣ国政府も加盟）違反、核兵器拡散防止条約違反の罪が追加された。

Ｆ県領地の正規陸軍に対抗する勢力である民兵会社を爆破したＣ国の工作員は、市街地

に潜伏している所を警察に見つかり逮捕・拘束された。F県領地の正規陸軍内部に潜入していると思われるC国の工作員に対しては憲兵隊が調査中…

また、海軍が外海で傍受した正規陸軍の無線通信については、海軍を疑心に追い込むための工作と、市街地に潜入した工作員に対する指示であることが、捕まえた工作員から聴取した内容から分かった。

作戦を終えて、F県領地の市街地に来た一行。遠くには、マスコミに囲まれ軍の護送車に乗り込まされている反乱軍の将校が居た。

それを横目に見て

「…これで、終わり…もう解放してくれるよな」

戦闘服から背広姿に着替えたHGはポケットからパイプを取り出し咥えると傍らにいるIFに言った。

「はい、ご苦労様」

IFは言った。

「報酬は？」

HGが問うと、IFは嬉しそうに

「この市街の屋台村はおいしいそうだから、私とYMの驕りでどう？」

IFはこの市街地にある屋台村でYMに美味しい店を紹介してもらって思いっきり飲むことを考えている。

「成功報酬の金は？」

あらためてHGはIFに対して片目を瞑り右手の親指と人差し指で輪を作り、残りの指を立てて言った。

「ない！」「ありません」

ＩＦどころかＩＦの後ろにいたＹＭまでキッパリ言った。ＨＧは両手を顔の付近に開いて静かに首を振ると、戦闘服から私服に着替えたＨＹを手招きする。駆け寄ってきたＨＹに

「あっそう…ＨＹ、二人がご馳走してくれるそうだから、ご相伴にあずかろう」

と言うと、

「いいですねー」

ＨＹは嬉しそうに答えた。

そんな、ＨＧとＩＦ達のやり取りを見つけ、ＩＹはＨＧの所に走りよるなり、

「准尉。わっ…私を〝かって〟下さい！」

と言い放った。その言葉を聞いて、ＨＹとＩＦは驚いた。

ＩＦとＨＹはそれぞれ

「〝かう〟って、〝買う〟の事？」「〝かう〟って、〝飼う〟の事？」

と想像した。当のＨＧ…ＩＹに詰め寄られて。

「どうした？〝かう〟とはなにかね？」

と呟えていたパイプを手に持ち冷静にききかえした。

「言葉通りです…私を〝買って〟下さい！」

ＨＧの前で両手を祈るように組んで話す…ＨＧには、ＩＹに保護施設にいる子狐か何かが「助けて、私をここから連れて行って！」と哀願している姿が重なった。

「…〝買う〟ねぇ…いくらで身売りするつもりかなぁ…おれ、ロリコン趣味ないけど…」

と、ＨＧがおどけて言うと

「ちっ、違います！私の能力を〝買って〟下さい！！」

と、赤面して言った。それを聞いたＩＦとＨＹは「なーーんだ、能力を〝買う〟のか」と、ホッとした束の間のあと

「「何ですって！」」
と二人同時に驚きの声を上げた。ＩＹはＨＧに自分を売り込んでいるのである。当のＨＧは困ってＩＹを見つめ
「金はない」
「じゃ、弟子にしてください！お金はいりません」
ＩＹはＨＧに詰め寄る。後ずさりするＨＧ
「弟子はとらん！」
「では、押しかけます」
と言って、ＨＧにしがみつくＩＹ
「困るよー」
すっかり困り顔のＨＧ。さすがの〝親父〟と呼ばれた男もＩＹの一途なところにタジタジである。
「なんと言われようとも、私ついていきます」
それを見たＨＹはＩＹの熱意を羨ましく感じて、
「じゃわたしも！」
と言って、ＨＹもＩＹに加勢するかのようにＨＧに詰め寄った。
「えー、勘弁してくれ！」
ＨＧは、ＩＦとＹＭに助けを求めるが、二人とも両手広げて肩の辺りに上げ、首を振った。

「巻き込まれ親父の反撃　＝完＝」